

インダス・プロジェクト
ニュースレター

インダス・プロジェクト ニュースレター

第3号

2008年5月1日発行

ごあいさつ

おかげさまで、インダス・プロジェクトも本研究2年目を迎えることができました。これもひとえにプロジェクトメンバーはじめとする皆様方のご支援ご協力の賜物と感謝しております。

本研究1年目の昨年度は栽培植物WGの現地調査や古環境復元WGの調査が行われ、先行していた発掘も本格化し、フル回転した1年でした。カーンメール遺跡ではインダス印章を押捺した土製ペンダントが見つかり、ファルマーナー遺跡では人骨とともに墓地が見つかるなど、発掘成果には著しいものがありました。パキスタンの政治情勢悪化のためガンウェリワラー遺跡での発掘ができなかったのが残念です。

今回のニュースレターは前回の栽培植物WGに引き続き、古環境復元WGの予備調査について、報告していただきました。このWGの成果はプロジェクト全体の成否に関わります。本年度以降の本格的な調査研究の成果が期待されます。

プロジェクトリーダー
長田俊樹

インド・グジャラート州古環境グループ予備調査報告 (2007/12/16-12/29)

前杵英明 (広島大学)

現地行動と行動概要

- 12/16 成田→デリー (前杵、宮内、松岡の3名)
- 12/17 インド地理調査所デリーランチなど訪問・資料収集
- 12/18 インド国立博物館など訪問・資料収集、横山合流
- 12/19 デリー→ウダイプル 考古班 (長田、寺村、遠藤、小茄子川) と合流

夕方 ウダイプル着：行動日程の調整と挨拶回り

ラージャスターン・ヴィディアピート (Rajasthan Vidyapeeth) 大学考古学教室を訪問し、今回の調査の概要説明を行なった。夕刻、考古班カウンターパートで今回の案内者のカラクワール (Kharakwal) 博士と明日からの調査コースの打合せを行なった。事前にこちらの希望を伝えてあったので、ほぼこちらの希望通りのコースで調査を行なうことになったが、一日の移動距離が長く、かなりの強行軍になる可能性があり、インドを初めて訪問するメンバーの体調に関して不安な面もあった。

■ 12/20 ウダイプル→ラーパル

終日車での移動となった。移動距離は500km近くあったと思われる。古環境班と考古班で2台の車に分乗し、国道8号線を南下した。道路の状況はかなり良好で思ったより早く移動できた。途中アラヴァリ山地の西縁部を通り平野に出たところで西方向に進路を変え、カッチ湿原方面をめざした。

ラーダンプル (Radhanpur) で宿泊する予定だったが、予想外に早く着いたので、明日のことを考えてラーパル (Rapar) まで駒を進めることにした。ラーパルには19:30頃到着したが、宿泊する場所がなかなか見つからず、グジャラート州公共事業局 (Public Works



写真1 舗装された国道を移動中



写真2 カッチ湿原の堆積物



写真3 カッチ湿原をカディール島に向かうバス



写真4 ドーラーヴィーラー遺跡と調査メンバー



写真5 ブロック状に崩壊するメサの斜面とケスタ地形

Development) のゲストハウスを見つけて交渉し、なんとか泊めてもらえることになった。管理人が非常に仕事に忠実な人で融通がきかず、最初はとまどったが、最終的にはなんとか丸くおさまった。考古班の若手は口ビーに寝ることになり非常に申し訳なかった。トイレや洗面所の水が十分に出ず、かける毛布もなく、はからずもインドの田舎都市旅行の洗礼を受けることになる。

■ 12/21 ラーパル→ドーラーヴィーラー→ラーパル

毎日快晴で気持ちが良い。インドにきてまだ雲を見えないことに気が付く。3時間くらい車で走ると真っ白なカッチ湿原を渡ってカディール島に続く堤防上の道に出た。

途中2ヶ所で、スコップを使って湿原を掘り堆積物を確認した。比較的陸地に近い場所では河川の運搬による細砂層が表面20cmくらいを覆い、その下位にはきわめて有機物に富んだ黒色シルト層が堆積していた。陸地から少し離れると砂層は見られなくなる。シルト層中には未分解の植物片が多数含まれており、泥炭に近い状態である。現在の湿地に葦などの汽水性植物が繁茂してい

るわけではなく、このような有機物に富んだ堆積物が半乾燥地域でどのようにして形成されるのかは疑問点として残った。雨季に一度この場所を訪問してみたいと感じた。

昼過ぎにドーラーヴィーラー (Dholavira) 遺跡に到着した。有名な貯水槽などの構造物を見学したが、発掘作業が進み、環境復元の材料となると見込まれていた貯水槽を埋めるオリジナルの堆積物はすでに取り除かれていたのは残念だった。また、すでに世界遺産に登録申請を進めているらしく、パキスタンとの国境にも近いこともあって、この周辺での自由な調査はやりにくいだろうという印象をもった。

帰路にいくつかの小規模なハラッパー期の遺跡を見て、7時頃ラーパルに帰着した。やはり宿泊所の確保が難しく、2ヶ所に別れての分宿となった。

■ 12/22 ラーパル→カーンメール→ジャムナガル

午前中カーンメール (Kanmer) 遺跡に到着。城壁や床面がずれた断面を見学する。現場から判断すると、ずれは断層そのものによるものではなく、重力によつてず

りおちた地滑りではないかと思われた。ただし、時期的な判断はできなかったが、構造物の数ヶ所でずれたり曲がったりしてるところが見られ、地震による強震動が原因で変形した可能性も十分考えられるので、今後の調査が必用であると思われる。

カーンメールを見下ろす寺院がある丘に登り、周辺の地形を観察した。典型的なメサ地形であり、山頂部を規定している硬岩層がブロック状に崩壊しながら斜面が後退してる様子が観察できた。

昼頃からリトル・ラン (Little Rann of Kachchh) に向かった。リトル・ランの中にある紅玉髓の鉱山を訪問した。紅玉髓のビーズは多くのハラッパー期の遺跡から出土しており、また遠くメソポタミアまで貿易品として運搬されたと聞き、感慨深く観察した。

帰路、リトル・ランの真ん中でスコップで小ピットを掘削し、堆積物の観察を行なった。上部 20cm くらいは有機物を多量に含む砂層だったが、その下はカッチ湿原で見たものと同様な真っ黒な泥炭質の細粒物でシルト分より粘土分が卓越しているように思えた。この泥炭がどれくらいの深さまで堆積してるのかたいへん興味がある。

午後は風力発電地帯を通り抜けて、サウラーシュトラ半島側に渡り、宿泊地のジャムナガル (Jamnagar) をめざした。途中まで道路のコンディションはよかったが、最後の 50km くらいが穴だらけの道でたいへん疲労した。また皆で泊まれるホテルがなかなか見つからず結局別々のホテルに泊まることになった。ホテルに入れたのは夜 11 時近かった。

■ 12/23 ジャムナガル→ドウワールカー

今日の移動は車で 2 時間弱で、比較的短いので気が楽であった。サウラーシュトラ半島北西端のドウワールカー (Dwarka) というヒンドゥー教四大聖地の一つにたどりついた。メンバーの疲れも少々たまってきたので、本日は基本的に休みにして、オプションで近くのシヴァ寺院とハラッパー期の遺跡であるナーゲーシュワル (Nageshwar) を見に行くことにした。寺院は 20 m を超える巨大なシヴァ神の像があり、インド人参拝客でにぎわっていた。遺跡は残念ながらため池の底に沈んでいることが判明した。

■ 12/24 ドウワールカー→ソームナート

今日はサウラーシュトラ半島西岸に沿って隆起サンゴ礁の調査を行なった。ドウワールカーでは石灰質砂岩の基盤に標高約 2 m のベンチが形成され、岩礁にはビー



写真6 リトル・ランでの掘削調査



写真7 ドウワールカーの侵食平坦面



写真8 浜に打ち上げられたサンゴ礫

チロックが付着していた。ドウワールカーの数 km 北方に数列のビーチリッジと堤間低地が発達する海岸があり偵察に行った。最前列のリッジには砂丘砂が載っており、砂丘中には少なくとも 2 枚の埋没土壌が確認された。リッジの高さは高いところで 7 m くらいあるが、堤間低地の標高は 3 ~ 5 m で、表層に 50cm 以上の砂が堆積している。堤間の古土壌や砂層の OSL 年代をもとに、この海岸の発達史がわかれば、この付近の海岸が第四紀



写真9 道路沿いに露出するミリオタイト

後期においてどのような変動を受けてきたのか推定できる可能性があると考えられる。

さらに北上し、TATA社の化学肥料工場があるミタプル(Mithapur)付近のビーチリゾートで海岸地形の観察を行なった。衛星写真で現成のサンゴ礁に見えた地形は基盤岩が侵食されたベンチ-ランパート地形であり、少なくともバリアリーフは形成されていなかった。しかし、海岸の砂浜には多数の造礁サンゴの礫が打ち上げられており、古環境解析に利用できそうな浜サンゴ(Polites)も数多く見られた。

サウラーシュトラ半島北西部には現成のサンゴ礁や隆起サンゴ礁は見られないことがわかってきたので、予定を急遽変更して半島西岸沿いに衛星写真をたよりに可能性がありそうな場所を探して南下することにした。

マハトマ・ガンディー生誕の地ポールバンダル(Porbandar)の数10km南の海岸で道路沿いにかなり風化がすすんだ石灰岩が露出していた。石灰岩は海岸から緩やかに傾斜しながら標高~30mの海岸に平行な細長い丘陵を形成しており、極度に溶食されカルサイト化した多孔質の岩塔群が地表面を覆っている。インドの地質図ではミリオタイト(Miliotite)とよばれる新第三系~第四系の砂質石灰岩となっており、少なくとも堆積構造がわかるような第四紀後期のサンゴは付着していない。これより南部ではこのような地形の海岸が続いている。

午後6時30分頃ソームナート(Somnath)に到着し、手早くホテルを見つけチェックインした。ここはこの辺りでは大きな漁港らしいが、町全体が魚が腐ったような異様な臭いでつつまれており、慣れてないわれわれ日本人にはかなり厳しい生活環境だった。インドなのにクリスマスの飾り付けがきらめき、もしかしたらポルトガルの影響でカトリック教徒もかなりいるのかとも思えた。



写真10 ストラパーダのビーチロック

■ 12/25 ソームナート→パウナガル

ソームナートの数km南方にあるストラパーダ(Sutrapada)という小さな漁港の近くで、衛星写真ではサンゴ礁に見える海岸地形が確認されたので偵察に訪れた。漁港から海岸に出ると沖合に礁嶺のような岩礁が見えたので、心をときめかせて海岸に沿って歩いてみた。しかし、そこはミリオタイトのベンチであり、現成のサンゴがわずかに打ち上げられている程度であった。ランパートの向こうの海食台から沖合にかけての斜面にはかなりの造礁サンゴが存在している可能性があるが、サンゴ礁を形成するには至っていない。現在の海岸線の中等潮位付近には典型的なビーチリッジが形成されていた。

われわれはさらに第四紀のサンゴ礁地形をもとめて南下し、旧ポルトガル領のディーウ(Diu)付近のコートラー・ネース(Kotra Nes)に到達した。大きな灯台がある岬になっており、サウラーシュトラ半島最南部にあたる。GPSによる緯度は北緯20°41'32.2"を示していた。ハワイ島と同じくらいの緯度である。しかし、そこはミリオタイトでできた台地状の丘陵とその前面の海食崖、その下のベンチという組み合わせの地形であり、熱帯の海岸を縁取る美しいサンゴ礁はみられなかった。

グジャラート州に典型的なサンゴ礁地形はついに確認できなかったことは非常に残念であったが、このことを確認できたことが今回の調査の成果であると前向きに考えることにした。

禁酒州だったグジャラート州ではアルコール飲料はいっさい販売されていなかったが、途中連邦直轄地(Union Territory)のディーウに立ち寄り食事した際、インド製ビールのKing Fisherを1本注文した。久しぶりのビールに生き返る思いだったが、かなり酔いの回りも早かった。遅い食事の後300kmくらい東に車を走らせ、パウナガル(Bhavnagar)市に到着したのは午後9時を過ぎていた。

■ 12/26 バウナガル→ロータル→ナル湖→
アフメダーバード

本日は調査最終日で、しかもロータル (Lothal) 遺跡とナル湖 (Lake Nal) といった主要な調査地が二ヶ所もある重要な日である。11 時 30 分ころロータル遺跡に到着した。遺跡は ASI (インド考古局) によって管理されており、博物館も併設されていた。有名は荷揚用のドックヤードとされる構造物には水が満々とたたえられており、管理者の意気込みと主張が感じられた。現在は直接船が航行できる大きな川とは直接接続していないので、当時の環境は現在とかなり違ったものであったという記述が多くの文献で見られる。

現在はその後の土地の隆起、もしくは周囲の沖積作用 (河川による埋積、プログラデーション) によって船が航行できなくなったという記述が多い。現在のドックの正確な標高が重要であるが、大縮尺の地図が見られないので解釈が難しい。航路を確保するための外につながる水路のような構造物もないらしいので、船着き場であったのかは本当のところわからない。船がそこから出土しているわけでもないらしい。ただし、大きな川の流路が偶然当時近くにあり、雨季の増水した時に船が航行できた可能性は否定できない。ロータルとナル湖、北部のリトル・ランを結ぶ線上に周囲より標高が低い低地帯が続いているようにも見える。

ナル湖には第四紀の湖成堆積物が数 10 m も堆積していることを述べた論文もあり、もしそれが本当ならかなりの速度でこの低地帯が沈降していることになる。しかしそれではロータルが離水して船が航行できなくなったという解釈とは矛盾することになる。ロータル付近の衛星写真をつかった地形分類図の作成、正確な標高データの取得、ナル湖の堆積速度の再検討などが必要となる。

昼食後ナル湖を訪れる。ラムサール条約に登録された野鳥保護区になっているらしく、法外な入園料を徴収された。衛星写真に写っていた「ナマコ」状の微高地は予想通り砂丘地形であることが確認された。ナル湖には多数の砂丘が沈水していることから、やはりかなりの速度で沈降しているのではないかとと思われる。ナル湖の水深は深いところで 1.5 m くらいらしく、大人ならどこでも歩いて入れるようである。

ここで 50 m 以上のボーリングをした研究者がアフメダーバード (Ahmedabad) にある PRI (インド物理学研究所) にいるらしく、今後はその研究者と連絡を取り合いながらナル湖での新たな掘削について検討することにした。午後 6 時頃アフメダーバードに到着し、地球



写真 11 コートラー・ネースの海岸浸食地形



写真 12 ロータルのドック？



写真 13 ナル湖

科学の手法をインドで先駆的に取り入れた D.P. アグラワール博士の自宅を訪ね、今回の調査についてご意見をアドバイスをいただいた。案内してくれたカラクワール博士と発掘準備にはいる遠藤氏はこの日の晩にウダイプル (Udaipur) に向けて出発した。

■ 12/27 アフメダーバード→デリー

本隊はここからデリーに帰るが、プネー (Pune) の

デカン大学に行く小茄子川氏と別れることになる。午前11時のデリー行き国内線に乗るべく、9時30分に国内線ターミナルに到着した。チェックインカウンターへ行くと係員が、「Jet Lite社のデリー行きは機体のトラブルでキャンセルになった。代わりにSpiceJet社のデリー行きに乗り換えて欲しい」と告げられ、あわてて変更しすでに離陸時間が過ぎていた同便に飛び乗るハプニングもあった。

結果として予定時刻通りデリーに到着できたので問題はなかったが、インドでは何があるかわからないので、早めに空港に行くことが重要であると実感した。またどんなトラブルも慌てず落ち着いて対応し、時には諦めて流れに身をまかせることも重要であると感じた。

久しぶりのデリーだったが、大都市の喧騒と空気の悪さに少々戸惑いを感じた。ホテルにチェックイン後はおのおの帰国準備やメールチェックなどで時間を過ごした。

■ 12/28 デリー→成田

インド最終日、フライトは夜なので日中は長田先生たちと合流しデリー市内で食事をした。我々が載る日本航空の成田便はほぼ定刻にインディラ・ガンディー国際空港を離陸し、翌朝6時に成田空港に着陸した。

■ 12/29 成田→本務地

成田で軽い挨拶をしたあと、年末の慌ただしさの中、おのおの本務地への帰途に着いた。

今回の調査結果と今後の展望について

今回の調査の第一の目的は、インド南西部グジャラート州近辺に数多く分布するハラッパー期の都市遺跡の衰退原因として考えられている、サウラーシュトラ半島の隆起（離水）について地形・第四紀地質学的な証拠を現地を確認し、次年度以降の精査ポイントを絞り込むことであった。

カッチ湿原やリトル・ランには薄い砂層の下位に泥炭質粘土層が堆積していることがわかった。もし、完新世のある時点で湖の周辺が広域的に隆起し、内湾環境から汽水環境に変化したならば、湿原の堆積物にその証拠が記録されている可能性があり、湿原での堆積物採取（コアリング）を行なう必要がある。しかし、パキスタン国境に近いカッチ湿原でのコアリング作業は許可が下りない可能性が高いことから、やや国境から離れたリトル・ランでのコアリングのほうが実現可能性がある。堆積物がどれくらいの厚さで分布しているのか見当がつかない

ので、事前にGPRなどで基盤深度を確認できれば効率がよい。コアリングが難しい場合は水が出る深度までスコップでトレンチを掘ることも最終手段として考えておかなければならない。リトルランでのコアリングについては、現在インド人地形学者のラージャグル博士とコンタクトをとっており、協力が得られれば共同で調査を行う可能性もある。

サウラーシュトラ半島では隆起サンゴ礁が発達していると記述がある論文（Gupta 1972）をたよりに、ほぼ全海岸線にそって踏査したが、顕著な隆起を示す海岸地形は見当たらなかった。おそらくその論文は打ち上げられたサンゴ礫や、新第三系の基盤岩中のデッドの貝化石の年代を測ったものと推定される。サウラーシュトラ半島北西部に数列のビーチリッジと堤間低地からなる海岸平野が分布している。低地やリッジ中の埋没土壌から有機物が採取できれば、海岸地形の発達過程を絶対年代を入れて復元できる可能性があり、半島先端部の隆起速度を求めることができる可能性がある。砂丘砂やビーチの砂そのものからOSLを使った年代測定も可能である。

今回の調査の第二の目的はサンゴ年輪や湖沼堆積物を使った完新世の古環境復元の可能性を探ることであった。サンゴについてはサンプルが採取しやすい完新世隆起サンゴ礁は分布していない。また現成のサンゴ礁も未発達であることが確認できた。年輪をつくる浜サンゴは沖合に棲息していることは打ち上げられた海岸の堆積物から推定できたが、完新世をすべてカバーするような大きなサンゴ群体の発見は難しそうであるし、ダイビングに好適なスポットや施設も見当たらなかった。サンゴに関してはグジャラート州では調査は難しく、ラクシャディープ諸島かモルジブ諸島で調査地を再検討することになった。

この地域で長期間の堆積物が連続的に採取できそうな唯一の湖沼が、アフメダーバード西方のナル湖である。ここは50mを超えるコアを採取して分析した論文があり（Prasad and Gupta 1999）、後期更新性以降同地域が沈降している証拠を提示している。しかしながら、インダス文明時代を含む完新世の堆積物は表層から1.5m程度であり、高分解能の環境変化復元はあまり期待できない。

サバルマティー川の河口付近に位置するロータル遺跡は、世界有数の潮位差が観測されるキャンベイ湾奥にあることから（平均±8m）、当時は海岸線付近に位置して高潮位時のみ船が行き来できた可能性はある。現在の標高は、アメリカ軍地形図から読み取ると、おおよそ40ft（12m）であることから、現在の標高では常時海

水が浸入するには高すぎるが、大潮高潮位時には、掘り下げた池には、おそらく海水が入ってくる可能性はある。季節的に年数回の高潮位時のみ海水が浸入するドックを造り、貿易をしていたのかかもしれない。いずれにしてもロータル遺跡より海側のデルタの形成過程を地形的に詳細に明らかにする研究は重要ではないかと考えられる。現地の近くの Alang という町には、大きな潮位差を利用した世界一の船舶解体・再生施設がある。インダス時代にもこのような潮位差を利用してロータルが存在していたのかもしれない。

インド・ハリヤーナー、ラージャスターン、パンジャブ州 古環境グループ予備調査報告

前杵英明 (広島大学)

現地行動と行動概要

■ 2/27 成田→デリー (前杵、八木、田村の3名)

■ 2/28 デリー→ローフタク→ファルマーナー→ローフタク

今回案内役のプラボド・シルワールカル (Prabodh Shirvalkar) 氏、およびシンデ (Shinde) 教授と合流。夕方ファルマーナー (Farmana) 遺跡着。行動日程の調整と挨拶。

昼ごろデリーでデカン大学博士課程のプラボド氏と合流し、車をチャーター。ハリヤーナー州のローフタク (Rohtak) 大学ゲストハウスに荷物を置いてから、さらに 30km 西にドライブして 16:30 ころファルマーナーに到着した。挨拶と遺跡をざっと見学してローフタク大学に引き返した。

■ 2/29 ローフタク→ファルマーナー→マディナ→ミタータル→ローフタク

午前中ファルマーナーを再訪し、遺跡横に掘られているピットで自然層と居住層が連続して観察できる地層断面を調査した。断面は地表面から 1.2 m 程度垂直に掘り込まれており、上から 0.8 m は先ハラッパー文化期 (pre-Harappan) からハラッパー文化期 (Mature Harappan) の遺物包含層である。その下 0.2 m は砂質シルト層で土器破片やわずかな炭を含んでいることから、人間の影響を受けた自然層の最上部であると判断した。それより下位は砂質シルトで河川性のものか風成のものか現地では判断つきかねたため、サンプルを採取した。

昼食後、付近の遺跡と砂丘地形を調査に行った。最初に訪れたのはマディナ (Madina) という遺跡で、彩文灰色土器 (Painted Grey Ware=PGW) を含むポスト・ハラッパー文化期 (post-Harappan) の居住層が自然層の上に直接重なっている遺跡である。ローフタク大学のマン・モーハン・クマール (Man Mohan Kumar) 教授によって発掘が進められており、教授に直接説明していただいた。

その後ミタータル (Mitathal) 遺跡に向かう途中、北西一南東方向に配列された比高 10 m 以上の砂丘を調査した。砂取り場の断面から、砂丘にはオリジナルの堆積構造が残されており、OSL 年代測定が可能であると判断された。ミタータル遺跡では、昨年訪れたとき側面を重機で削っていたので断面が出ていればと期待していたが、すでに断面は崩土に覆われ見るができなかった。本日はあちこち強行軍で回ったので、ローフタク大学のファカルティハウスに戻ったのは 21 時近かった。

■ 3/1 ローフタク→ラーキー・ガリー→ハーンシー→ヒサル

昼前ころインド最大のインダス期の遺跡と言われるラーキー・ガリー (Rakhi Garhi) 遺跡に到着した。数多くのマウンドが未発掘ということで今後新たな発見が期待される遺跡である。現在の住民が遺跡の上に居住しており、なかなか発掘が難しいそうである。

村の一角にマウンドを削り込んだ大路頭がある。遠くから見たら段丘堆積物の地層のように見えたが、真下から見上げると 5 m 以上すべて居住層であり、中にはレンガの構造物も含まれていた。この路頭を記載して編年するだけで一つ報告書が書けそうな立派な路頭であった。

ラーキー・ガリーからいわゆる涸ちョウタング (Lost Choutang) 川旧河道にそって南下した。現在は雨期も含めて海までつながった川は存在せず、雨期に低所に雨水がたまって川のように見える程度であるらしい。これがインダスの時代にはハーンシー (Hansi) からヒサル (Hisar) を通ってスーラトガル (Suratgarh) 付近でガッガル (Ghaggar) 川に合流してたとする研究がいくつか見られ、その可能性についてさぐるため、旧流路 (とされる) 地域沿いに分布する砂丘の形成年代を計測するのに都合の良い路頭を探しながら車を走らせた。

ハーンシーとヒサールの間にマヤル (Mayar) という村があり、そこに砂丘の堆積構造を残す路頭があった。地主もたまたまそこにいたので次回 OSL 用のサンプリング候補地としてチェックした。近くに軍の駐屯地があるので調査には若干の配慮も必要と思われる。ヒサル



写真1 ファルマーナーでの遺物包含層と自然地層の境界部ピット

の Palki Hotel にて宿泊。

■ 3/2 ヒサル→ガンディー・バーリー→シールサー→ハヌマーンガル

ヒサルから西に向かって旧チョウタング川といわれているコースに沿って車を走らせた。ヒサルの町そのものが砂丘上に形成された町で、ヒサルから西側はヤムナー川からくる灌漑水路の到達限界に近い。そのためか景観は急激に乾燥化し、砂丘の密度も増してくる。

砂丘帯を越え、ガンディー・バーリー (Ghandi Bari) の町からシールサー (Sirsa) 方面に少し行ったところに、灌漑水路脇まで達している北西-南東方向に延びる砂丘の一部が露出していた。この砂丘でも砂のサンプリングと堆積構造の目視を行い、OSL 年代測定の候補地としてチェックした。

同時に干上がった灌漑水路中にたまった堆積物をみると、シルトであった。シルトは遠くヤムナー川からくる水流に混濁して運搬されるのみで、その他の地表堆積物は地表付近を風で運搬される砂 (細砂) のみである。

シールサー手前のダルバギラ (Darbagila) という村では農業用ため池を掘削している現場に行きあつた



写真2 ミタータル遺跡付近の砂丘遠景



写真3 ラーキ・ガリーの遺跡大露頭

た。このあたりはいわゆるチョウタング川流域からガッガル川流域に入ってきているところで、すでに砂丘密集帯を越え沖積低地が広がっている。Naruse (1985) の中で Tohana という地名で河川堆積物と砂丘堆積物の記載が報告された付近である。

掘削現場は小麦畑から約 5 m 掘り下げられ、法面工事を行っている最中で、一部地層断面が観察できた。上位 3 m は細かい砂の層で均質で kankar と呼ばれる炭酸カルシウムのノジュールは含まれていない。これに対して下位 2 m はシルトを含む細砂層で、カンカール (kankar) を含んでいる。上位の砂層は風成砂と思われるが、下位のシルトを含んだ地層はガッガルの氾濫原堆積物かもしれないし、雨期の地下水位の上限を示しているだけかもしれない。粒度分析用のサンプリングを行った。

シールサーでは市街地北方を流れる現在のガッガル川の現流路を調査した。畑や道路がある氾濫原から約 5~6 m 掘り込んだところを流れる現流路には乾季であるため、よどんだ流れのない泥水がたまっているだけであった。現河床から 2 m くらい高いところにいわゆる高水敷にごみ捨て用の穴が掘ってあり、断面を観察できた。数 cm の薄いシルトと数 10cm の砂の互層で、雨期の



写真4 マヤルの砂丘

氾濫時とその終息時の一連の洪水シークエンスであることがよみとれた。

橋脚に異常水位のマーキングがあり、最近では1988、1993、1998にオーバーバンクするような洪水が記録されていた。5年に一回くらい（ラ・ニーニャの周期？）雨期に多量の雨が降り、現ガッガルが氾濫してシルトを氾濫原に供給していることがわかった。夕刻宿泊地のハヌマーンガル（Hanumangarh）に到着し、昨年と同じホテルに宿泊した。

■ 3/3 ハヌマーンガル→カーリーバンガン→

ピーリーバンガン→ジャクラワキ→ハヌマーンガル

ガッガル川沿いのインダス文明期最大の遺跡であるカーリーバンガン（Kalibangan）および併設されている博物館を見学した。カーリーバンガンはメインの道路沿いにある初期ハラッパー文化期（Early Harappan）から（Mature Harappan）の非常に巨大な遺跡であるが、保護・保存がほとんどなされてない様子で、荒れ果てたレンガと焼き物の残骸という印象であった。博物館には発掘当時の写真や出土品のレプリカが展示してあった。発掘当時は大変立派な城壁や住居跡などが現れていたようであり、現在の荒れ果てた様子はたいへん残念であった。ガイドのプラボード氏にインダス時代の土器編年とタイポロジーについて、実物を前に説明してもらった。

カーリーバンガンから数km南でやや河道側に近いところにピーリーバンガン（Piribangan）という村があり、そこには歴史時代初期の比較的大きな遺跡があった。ピーリーバンガン遺跡のすぐ脇でパイプ式の汲上げ式井戸があったので、地下水位について住民に聴取り調査を行った。それによると、パイプは地表下約70ft（21m）まで入れており、その深さ以下にある砂層に大量の水分が含まれているようである。水はやや塩味がした。70ft



写真5 ダルバギラでのため池露頭

より上位はシルトや粘土が多く含まれるいわゆる難透水層である。

また、現在のガッガル川にそって比高2m程度の堤防が20年ほど前に建設されたらしいが、それまではほぼ毎年ピーリーバンガンあたりまで雨期には冠水し、1ヶ月くらいは水が引かなかったそうである。堤防建設後はほとんどなくなったそうである。

その後ガッガル川の河道と堤防を調査に行った。堤防の外側、つまり河道部分（高水敷、低水敷）は内側の氾濫原より約1.5mほど低くなっており、所々に水たまりができていた。堤防には高水敷から2.0mくらいまでシルトが付着しており、今年の雨期の水位を示しているものと推定された。高水敷の幅は100m～200mくらいで、ここでも小麦の栽培が行われていた。

地下水位はピーリーバンガンよりやや浅く、55ft（17m）くらいから汲上げていたが、川に近いからかまったく塩味がしないおいしい水であった。地下150ft（45m）以下には大量のカンカールが含まれる黄色いシルト層があるらしく、氷期の風成堆積物かもしれない。これらの聴取り調査から、すくなくともこのあたりでは、ガッガル川は現在の気候で自然の状態ならば毎年氾濫し、河畔にシルトを供給していることがわかった。現在は上流部でかなり取水されていることを考えると、気候変動などの急激なガッガル川の流量変化を考えなくても、インダス文明期に人口を支えられる水流はあり、また、当時の人々が地下水もうまく利用していたとすればなおさらのことであるという感想をもった。

午後からはチョウタング川との合流地点とされるスーラトガル近くのラングマハル（Rangmahal）村にある巨大な砂丘の調査を行った。植生がほとんどついてないので活動砂丘と思われ、砂のサンプルを採取した。ここからチョウタング川沿いにさかのぼると、水をためる大きなダムがいくつか砂丘と砂丘の間に建設されており、

そこにたまった水が衛星写真で黒く写っていたことを確認した。つまり、現在チョウタング川は少なくとも地表を流れる河流としては存在せず、ガンディー・バーリーあたりで南から張り出している砂丘群に分断され、ヒサルより上流部では一連の河道として認識できるような流路はない。

昔の河道沿いに地下水脈があり、現在もそれにそって地下水が流れており、ガッガルとの合流地点付近で地表水として現れているという解釈もできるかもしれないが、バドーパル (Badopal) という村付近では、南東から北斎方向に延びる砂丘と砂丘の間にダムを作って水を溜めている。つまり地下水は東のヤムナー川側から供給されているのではなく、南のアラヴァリ山地側から供給されているのである。インダス時代に、ヤムナー川付近から流路がつながったチョウタング川が存在していたとする説は、ますます怪しくなってきたと感じられた。

夕方5時ころハヌマーンガルにもどることができたので、ハヌマーンガルの城郭遺跡を見学した。

■ 3/4 ハヌマーンガル→スーラトガル→アヌーブガル

Suratghar 付近には、主な遺跡は初期歴史時代以降のものしか分布していない。スーラトガルとアヌーブガル (Anupgarh) の間のガッガル右岸側にあるブギア (Bugia) という村に、初期歴史時代の遺跡がある。その遺跡は前回訪問したとき、活動中の砂丘にまさに覆われかけていたので、遺跡の埋没過程が観察できるよい事例として調査する予定で訪れた。しかし、ここ1年間で畑の拡大のため大きく地形改変されており、遺跡の痕跡は全く残っていなかった。

その次に、ガッガル左岸側にわたり、43GB という機械的な名前がついた灌漑開拓村のインダス期の遺跡を訪問した。ここは未発掘で規模もなかり大きく、背後に砂丘が迫っており、またガッガルにも近いことから、遺跡と河川と砂丘の層序関係が観察できる可能性があるサイトである。遺跡の半分は現在の埋葬地として利用されているが、半分はまだ未利用なので発掘できる可能性はある。そのような関係が観察できる自然路頭はなかったが、遺跡の一部は砂丘砂に覆われつつあった。

43GB の背後には巨大な砂丘が迫っており、その尾根の先端にはシク教の寺院がある。また、再堆積の可能性が大きい、砂丘上にインダス期の土器片が多数散乱していた。インダス期にすでに砂丘がこの付近まで形成されていたのか、気になるところであるが、砂丘下部に大規模な砂取り場があり、砂丘底部の OSL 年代測定用のサンプルを採取する候補地としてマークした。早めにア



写真6 シールサーでの乾季のガッガル川

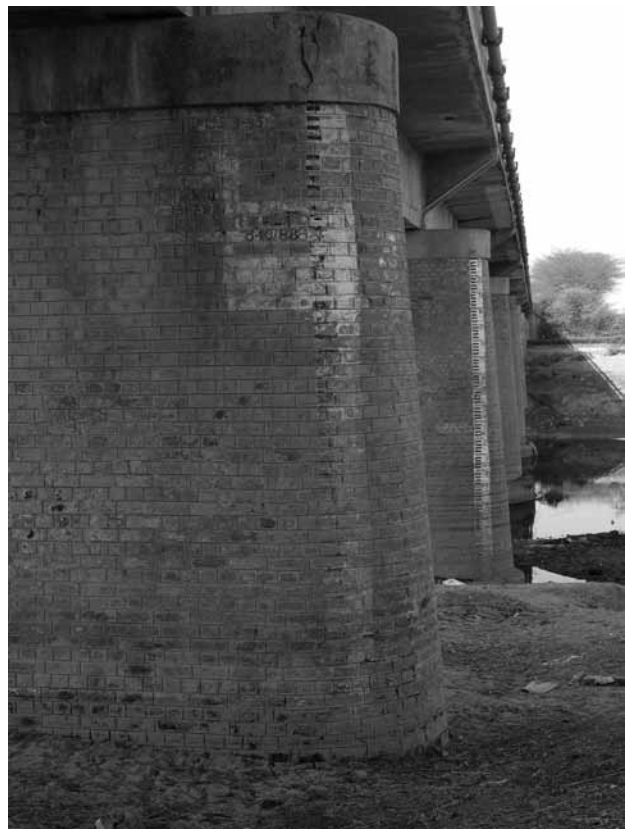


写真7 ガッガル川の増水記録を示す橋脚



写真8 朝霧にかすむカーリーバンガン



写真9 ピーリーバンガン付近の乾季のガッガル川



写真10 ラングマハルでの砂丘露頭の調査



写真11 43GB村の大砂丘上からみたガッガル川氾濫原

ヌープガルに到着し、宿泊所を確保した。

■ 3/5 アヌープガル→4MSR→パロール→
アヌープガル

午前中はパキスタン国境まで数キロのところにあるガッガル川右岸側にある4MSRという村にある初期ハラッパー文化期からハラッパー文化期の遺跡を訪れた。小麦の畑がある氾濫原から約5mほどのマウンドを形成しており、一部埋葬地として利用されている。畑を広げるときに一部遺跡の側面が削られており、そこで1mほどの地層断面が露出してた。最下部のシルト質細砂層に注目して観察したが、土器片が含まれており、自然の地層ではないことが判明した。

この遺跡も未発掘で、ガッガルの挙動と遺跡層の関係が見られる可能性がある精査の候補地である。地下水はやや深く、100ft (30 m) 以下から汲上げていることが住民からの聞き取り調査によってわかった。また、最近では雨季でもガッガルが堤防(3m程度)を越えて氾濫することはないらしく、ピーリーバンガンと同じ状況であった。



写真12 4MSRでの干上がった乾季のガッガル川河道

次にメイン道路沿いの59GBという村の近くにあるポスト・ハラッパー文化期の遺跡を訪問した。ここはすでに畑造成とレンガ用の粘土取りによって大きく掘り込まれており、マウンドのようなオリジナルの遺跡地形は残されていないが、土器片はかなり高密度に散乱している。またポスト・ハラッパー文化期の典型的な土器である彩文灰色土器が数多く分布していた。ここは、掘り込まれている穴の側面で、土器を含有しない自然層と遺物含有層との境界が見られることから、自然層(河川性?)のOSL年代値が求められる可能性が期待できる。荒地なので若干スコップなどで掘り込めば、採取しやすい露頭を作ることは可能であろう。

次にガッガル右岸からの砂丘に覆われつつある58GB村の後期ハラッパー文化期の遺跡を訪れた。北側から延びてきた砂丘が遺跡の半分くらいを覆っている。ハラッパー期の遺跡は砂丘の下に埋もれて、まだ未発見のまま存在しているのかもしれない。Harappan wet ware とよばれる波形紋様がいっぱい土器片が多数分布していた。

最後に70GB(パロール(Baror))という8m以上の比高をもつ大規模な遺跡を訪問した。ここはASIに

よってすでに発掘されているが、報告書は出版されていないらしい。遺跡基部と自然層の関係がわかる露頭がないか探索したが、残念ながら見つからなかった。

■ 3/6 アヌーブガル→ガンガナガル→バヒンダー→コート・カブラ→ファディオコート→アムリトサル
ガッガル（インド国内での）下流部付近の遺跡と堆積物の予備調査は終了したので、われわれはサトレジ川がヒマラヤ山麓に出てくる場所でのサトレジ川の流路変遷の可能性について検討するため、一路進路を北にとった。とはいえ距離にして600kmくらい離れているので車では1日でたどり着くのは困難である。

当初はガンガナガル(Ganganagar)とルディアナー(Ludhiana)で中継して2日かけて山麓の町ローパル(Ropar)に到着する予定であったが、1日目の移動をちょっと無理して国境の町アムリトサル(Amritsar)まで足を伸ばした。次の日が楽になると、インド・パキスタン分離独立に際して、またインディラ・ガンディー政権とパンジャブ州が対立した時期にいろいろな事件があった有名な町をこれを機会に訪問してみたかったのもある。

実際に車でほとんど走りっぱなしで8時間くらいかかった。アムリトサルに到着する前に一度サトレジ川を渡った。ベアース川と合流した後のサトレジ川なので、どのような大河川が見られるかと期待していたが、河床に水はあまりなく、湿地帯のようになっていた。今は乾季とは言え、このような状態なのは、おそらく上流でほとんどの水を灌漑水路側に取水してしまって、パキスタンには一滴も水を渡さないというインド側の戦略によるものではないかと考えられる。夕方、インドとパキスタンの間で唯一開かれているワガ(Wagha)国境に行き、国境警備隊の国旗降納セレモニーを見学した。

■ 3/7 アムリトサル→ルディアナー

本日も移動日。午前中黄金寺院および併設されている博物館を表敬訪問し、インド独立運動の引き金になったアムリトサル虐殺事件の遺跡を見学した。昼食後、ルディアナーにむけて移動を開始、16:00ころ到着した。

■ 3/8 ルディアナー→ローパル→チャンディーガル→カルカー→アンパーラー

深い霧がかかる中、サトレジ川から取水されてるSarhand Canalに沿って車を走らせた。途中の砂丘地形を調査した。砂丘は小規模で、いずれも農地拡大の折、取り去られているが、一部道路際にオリジナルと思われる



写真 13 国境の町アヌーブガル

る砂丘地形がみられる。農民からの聴取り調査によると、砂丘砂は比較的薄く広がっていたようで、表層1~2mくらいが砂だったようである。その下はシルトを含んだ黄褐色の土であり、農業に適しているようである。砂丘砂を取り除いて、ぼた山のようにいたるところに積み上げていた。

調査地はサトレジ本流に比較的近い場所だったことから、定期的にサトレジ川は氾濫し、このあたりまでシルト層を供給していたものと考えられる。とすると河畔砂丘はそれほど古いものではなく、灌漑設備が整い人手が入る前のごく最近まで活動していた可能性が高い。灌漑用水路のすぐ脇なので地下水位は浅く8ft(2.4m)くらいであり、2km離れると40ft(12m)まで深くなるらしい。

ローパルのすぐ手前でたいへんめずらしい地形に出くわした。シワーリク丘陵から流れを発生し、西流してサトレジ川に合流するBudhki Nadiという川の下を灌漑水路が通り、自然の川が用水路の上を流れるための橋が建設されていた。川の橋である。このような構造物を見たのは初めてだったので驚いた。用水路は川が作る自然堤防の部分を深く掘り込まれて計画的に一定の傾斜で作られているため、このようなことになったのであろう。普通は用水路がトンネルなどで川の下を通るのならまだわかるが、水量が少ない支流の河川より、安定して大量の水を下流に供給して大地を潤すため、灌漑水路のほうがメインであるということなんだろうと解釈した。

ローパルの町はパンジャブ州知事が訪問する予定があるらしく、町中警察官が配備され、ヘリコプターは上空を舞っているし、パトカーはサイレンを鳴らしながら走っているし、とても写真を撮るに撮れるような雰囲気ではなかった。サトレジにかかる橋をわたって対岸の段丘上にシク寺院があり、そこからは静かにサトレジを眺められ、写真を撮ることができた。



写真 14 ローバル付近で灌漑水路上を高架でまたぐ
サトレジ川の支流

予想通り、サトレジ川がローバルの町を越えて西側に流れていたような旧河道地形は見当たらず、河床から10 m以上も切り立った侵食崖が氾濫原と現河床を分離していた。もちろん雨季にはこの河床いっぱいになるほど水量が増え、たまにはオーバーバンクすることもあるはずである。しかし、恒常的に別方向に流れていたのなら大きく掘り込まれた河道が形成されなければならないし、それが4000年くらいですべて消えてなくなるほど、乾燥した当地では地形変化は早くないと思われる。

ローバルからサトレジ川旧河道と言われているコース沿いに、ガッガル川が流れるチャンディーガル(Chandigarh)まで車を走らせたが、そのような旧河道地形はまったくみられない。ただし、シワーリク丘陵から流れ出している支流はサトレジ水系とガッガル水系は明瞭な分水界はなく、パンジャブ平原の中で自然に分水している。このような分水界は不安定であるので、現在サトレジに合流してる支流が当時ガッガルに合流していた可能性は否定できない。現にガッガルの水系を現在人工的に水路を掘ってサトレジ水系に付け替えられてる場所も衛星写真で確認できる。それだけ、水系変化が容易であるということである。

途中借り上げた車がオーバーヒートするアクシデントに見舞われたが、チャンディーガルからガッガルにそって上流にたどり、ガッガル源流部の写真を撮影したのは日沈直前だった。明日のデリー帰着時間のことを考え、アンバーラー(Ambala)の手前まで車をすすめて国道沿いのホテルに宿泊した。

■ 3/9 アンバーラー→デリー

デリーは渋滞があるとのこと、また車の調子が悪いことも考え、ホテルを早めに出発した。6時に頼んだ朝食を6時から作り始めるなど、インドらしいフレンドリー



写真 15 ローバルのサトレジ川の取水堰

なサービスに見舞われたが、それでも午後1時にはデリーの予約してあるホテルに到着できた。デリー市内の通行にはEicher社製のデリー市内マップが大変役に立った。アンバーラーから国道1号線を走ってきたが、道はかなり整備されているのだが、トラクターや牛や馬や、象までも走って(歩いて?)いるので、やはり道路は混とんとしている。ほぼ5 kmごとに横転したトラックやトラクターが見られ、急速に整備されるインフラに人間社会が追いついてないという感想を持った。夕方、9日深夜に立たれる長田先生と寺村さんと合流し、久しぶりに和食を堪能した。

■ 3/10 デリー→成田

インド最終日、フライトは夜なので日中はデリー市内のムガール朝の遺跡を訪問した。月曜日だったので休館日のところが多かった。我々が乗る日本航空の成田便はほぼ定刻にインディラ・ガンディー国際空港を離陸し、翌朝6時30分に成田空港に着陸した。

■ 3/11 成田→本務地

成田で軽い挨拶をしたあと、明日の大学入試のため、早々に本務地への帰途に着いた。

今回の調査結果と今後の展望について

今回の調査の第一の目的は、インダス文明の盛衰を左右したと言われているロスト・サラスヴァティー問題、いわゆるガッガル川の流路変遷について、地形や遺跡の分布状況から、過去の河川状況を示唆する地形・地質学的的痕跡を探索し、来年度以降の精査地を選定することであった。まずは当時のガッガルの大きな支流の一つとして考えられ、ヤムナーと接続してたとの説もあるチョウタング川であるが、現在は川としての痕跡はなく、旧流



写真 16 カルカー北方のガッガル川上流部

路という説がある地域は砂丘によって分断されている。砂丘の年代を出せば、それより後に川が流れていたことは否定できるので数ヶ所の候補地から OSL 年代測定用の試料採取を行いたい。またガッガルとの合流地点付近で多量にわき出している地下水がどこから来たものなのか、水のサンプルから源流地が推定できるか専門家に相談してみたい。

ガッガルの本流と当時の流量の関係であるが、まずは衛星写真を使って、地形分類図を作成する。それをもとに、編年がはっきりしている遺跡付近で、その直下の地層の年代と堆積構造の観察することによって、人々が住み始めた頃の河畔の地形環境を解明し、現在より多い水量の河川が存在していたのかどうかを検討する。また遺跡背後にある巨大な砂丘がいつごろから形成され始めたのかも OSL 年代測定により検討したい。遺跡の発掘には許可が必要であり、許可が取れるかどうか分からないが、地主の許可さえ得られれば、遺跡付近で遺跡を崩さない程度のピットを開けることは可能ではないかと思うので、発掘とは切り離して考えてもよい。また、ガッガル源流部での山地では小さな河川争奪地形がたくさんあることが報告されており、河川流路区分図と地滑り分布図を作成し、ガッガル川の集水域が多少なりとも変化した可能性があるのか検討してみる。これには地形図、衛星写真と DEM データを用いる。河川争奪のきっかけとしてヒマラヤ山中、山麓での大地震の発生は可能性として大いに考えられるので、活断層の活動履歴調査も行いたい。これは Wadia Institute for Himalayan Geology との共同研究になるかもしれない。

パキスタン・シンド州の遺跡を訪ねて

上杉 彰紀（総合地球環境学研究所）

4月17～24日にパキスタン、シンド州に所在する遺跡を訪ねる機会を得た。昨年の後半よりパキスタンの政治情勢が悪化し、ベナジール・ブット（Benazir Butto）元首相の暗殺事件で最悪の事態を迎えるにいたったが、2月の総選挙を機に少なくとも表面的には政治情勢および治安の安定化が進んでいる。いささか緊張した心持で、今回パキスタンを訪れることとなった。

4月16日インドの首都デリーからパキスタン航空の飛行機で1時間足らずでパキスタン北部の中心都市ラホールに到着する。機内にはインドに招かれて帰国の途に就くパキスタン人の団体と、パキスタン経由で中東へと出稼ぎに出かけるインド人が乗客の大半を占める。日本人乗客としての私には、いったいどこへ向かうのかよくわからない雰囲気であった。

夕方の6時半ごろにラホールに到着したが、インドに比べるとラホールの街中は薄暗く、暗澹たる気持ちになったが、馴染みのホテルに到着し、一段落した。ホテルのマネージャーと会話をする限りでは、依然として混乱する政治情勢に取り立てて不安がある様子もなく、1年ぶりに訪れた私に対して、最近あまり来なくなったけれどもどうしたんだという質問をしてくる。生活基盤がそれなりにしっかりしている人たちにとっては政治情勢の悪化が直接日常生活に影響を与えているわけではないようだ。

4月17日にラホールからシンド州の主要都市のひとつであるサッカルへと空路で移動する。サッカル空港には昨年地球研に外国人研究員として滞在した Q.H. マッラー（Mallah）さんとその同僚である G.M. ヴィーサル（Veesar）さんが迎えに来てくれた。日本からの訪問を心から喜んでくれている様子で、パキスタンの政治情勢と治安は安定していることを力説してくれた。実際、サッカルのような地方都市に来ると、中央の政治情勢はほとんど無関係のようにも見える。それでも街頭のいたるところに暗殺された Butto のポスターが貼られているのを見ると、多少の緊張感を覚えてしまう。ブットはサッカルとインダス川をはさんで位置するルールカーナーという町の出身で、シンド州はとにかくブットの支持者だらけといった印象を与えている。

マッラーさんが教鞭をとるハイルプルのシャー・アブドゥル・ラティーフ大学（以下、ハイルプル大学とする）

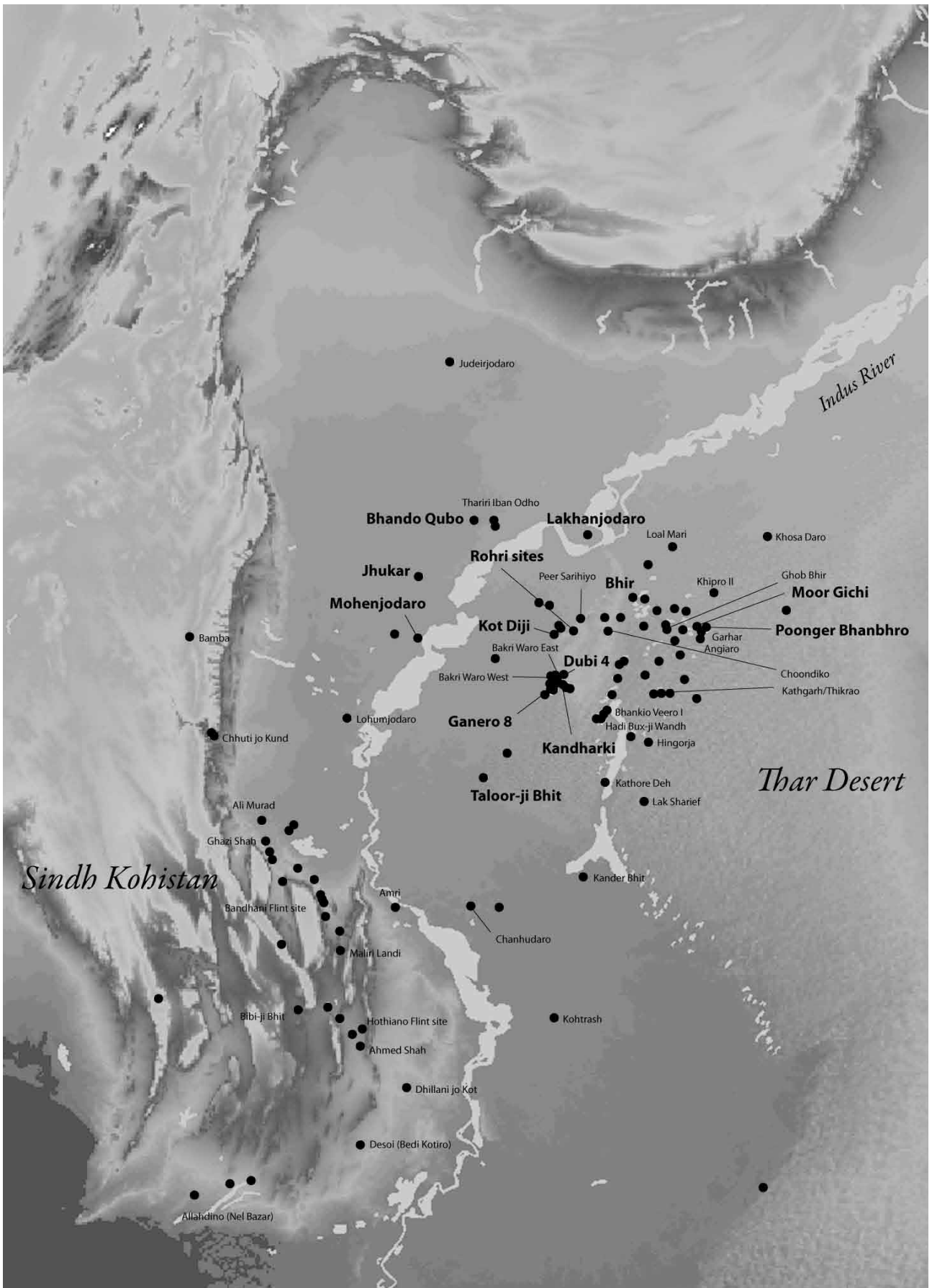


図1 シンド地方の遺跡と今回訪れた遺跡（太字）

に到着し、そのゲストハウスに滞在することとなった。ともかくも宿舎のベッドに横たわり、今回の出張の目的地まで無事たどりついたことに深く安堵感を覚えた。ちなみにマッラーさんはこの4月に教授に昇格し、その同僚であるヴィーサルさんは准教授である。2人は考古学部の教員の中でも活発に調査に取り組むコンビであり、インダス・プロジェクトの刊行物である Occasional Paper に寄稿された論考で紹介された遺跡の大半はこの2人によって発見・調査されたとのことである。

* * *

4月18～24日には、マッラーさんとヴィーサルのご厚意で、ハイルプル周辺の遺跡の見学に出掛けることとなった。前置きが長くなってしまったが、ここから本題である。

4月18日にはインダス考古学の研究史上名高いモヘンジョダロ(Mohenjodaro)遺跡とジューカル(Jhukar)遺跡、そして1998年にハイルプル大学が調査を実施したバンドー・クボ(Bhando Qubo)遺跡を訪れた。

モヘンジョダロ遺跡はいうまでもなくインダス文明を代表する都市遺跡である。外国人は入場時にノートに氏名・住所などを記入する義務があるが、自分の名前を書

くついでにページをめくってみると、今年になってまばらながらも日本人を含む外国人の訪問客の氏名が増えていくことが見てとれた。加えて訪問当日はパキスタン人の家族連れが多数遺跡を訪れているのも意外であった。というのも18年前に初めてモヘンジョダロ遺跡を訪れた時には私たち以外に訪問客を目にすることがなかったからである。

遺跡を一巡したが、1980～90年代にユネスコの主導で行われた遺跡の修復・保存整備の甲斐があっただけか、かつて心配された塩害の進行は食い止められているようであった。しかしながら、未調査区域に対する保存の意識は低いようで、発掘区域内からの排水される水が未調査区域に眠る遺構を破壊する恐れがあるというマッラーさんの観察に今後の遺跡全体の保護を視野に入れた計画の必要性を痛感した。

モヘンジョダロ遺跡から北に直線距離で26kmほどのところにあるジューカル遺跡は、インダス文明末期からその衰退直後に位置づけられるジューカル文化の標準遺跡である。この遺跡の周辺は典型的な農村地帯ののどかな景観であるが、マッラーさんとヴィーサルさんによれば強盗団が潜伏する地域ということで、足早に遺跡のマウンドに駆け上り、数枚の写真を撮影して即座に遺跡をあとにする。シンド州のインダス川沿岸地域は森林地



写真1 モヘンジョダロ遺跡



写真2 ジューカル遺跡

帯が多く、強盗団はこうした森林地帯に潜伏して近辺の富裕層をターゲットにしているという。

簡易型の GPS によればマウンドの高さは 11m ほどである。その平面規模を計測するにはいたらなかったが、想像を超えて大きなマウンドであった。遺跡は 1930 年代に N.G. マジウムダール (Majumdar) によって発見されたが、その後 1973 年に M.R. ムガル (Mughal) によって発掘調査が行われている。インダス文明の末期以降、シンド地方では遺跡数が激減することが指摘されているが、この時期のジューカル式土器をみると文明期のハラッパー式土器とは大きく異なっており、土器様式の変化は遺跡数の減少という社会変化と関係したものと想像される。その一方でジューカル式土器に類似する土器はグジャラート地方にも広く散見されるとともに、インダス式印章に代わって幾何学文をあらわした土製印章がジューカル文化期にパローチスターン地方からシンド地方に登場するという現象は、インダス文明の衰退とはインダス川流域に暮らした人々の絶滅を意味するのではなく、都市社会が何らかの事情によって変容した結果であることを教えてくれる。

次いで訪れたバンドー・クボ遺跡はジューカル遺跡から約 33km、モヘンジョダロ遺跡から約 56km 北に位置している。この遺跡は東西約 75m、南北約 100m、比高差約 10m のマウンドである。マウンド北寄りの最高所には 17 世紀ごろに建てられたイスラーム聖者廟があり、マウンドの南裾には数多くの墓がつくられている。1998 年にマウンドの北半を切り崩して舗装道路が建設されたため、ハイルプル大学がその破壊部分を精査して出土遺物を回収することとなった。その遺物はハイルプル大学に保管されているが、マッラーさんの報告にもあるように、この遺跡ではインダス文明期以前の層からパローチスターン地方の土器・土偶が出土していることで注目される遺跡である。

ニュースレター第 1 号の拙稿に記したように、インダ



写真3 バンドー・クボ遺跡

ス文明直前の時期（前 2700 ～前 2600 年ごろ）にはシンド地方とパローチスターン高原中央部の文化交流が強化され、その結果として文明社会が成立した可能性が高いのだが、このバンドー・クボ遺跡の出土資料はこの文明直前期にパローチスターン地方で製作された器物が平原部の奥深くにまでもたらされていたことを物語っている。確かに、この直前期にはパローチスターン系の器物の分布が高原部から平原部に向かって分布を拡大することがこれまでに知られている遺跡にもみることができののだが、インダス川の沿岸付近の遺跡でパローチスターン系器物がまとまって出土したのはこのバンドー・クボ遺跡がはじめてである。このプロジェクトの期間内にマッラーさんと共同で正式な発掘調査の報告書を出版できればと考えている。

4 月 19 日には、ハイルプルから一路南に約 94km のところにあるタルール・ジー・ビート (Taloor-ji Bhit) 遺跡に向かう。この遺跡はインダス平原部とその東のタル砂漠のちょうど境界付近に位置する遺跡である。周辺はすっかり砂丘に囲まれているが、砂丘の先には緑豊かな耕作地がその姿をのぞかせている。砂丘に囲まれた低地を中心にはっきりとしたマウンドが位置し、その東に向って膨大な土器片が地表面に分布している。その範囲は南北 400m、東西 250m ほどに及ぶ。昨年 4 月にパンジャープ州チョーリスターン地方のガンウェリワラー遺跡を視察した長田先生から、膨大な土器片の散布状態をお聞きしていたが、遺跡の規模は違えども遺物分布の密度は同じようなものであろうと想像するほどの密度に驚きを覚えた。中にはハラッパー式彩文土器の破片も散見され、インダス文明期の遺跡であることがわかる。マウンドそのものは直径 20m ほどと決して大きくないが、これほどの量の土器が廃棄されているということは、相当集中的な居住活動が営まれたのであろう。

タルール・ジー・ビート遺跡から一度ハイルプル大学に戻り、休憩をとる。夕方になって再び出発し、ハイル



写真4 バンドー・クボ遺跡の出土遺物

プルの南 18km のところにあるコート・ディジー (Kot Diji) 遺跡に向かう。この遺跡もインダス考古学ではその名を知らない者がいないほどの重要遺跡である。マウンドは直径約 120m、比高差 10m ほどだが、その周囲数百 m に及んで遺跡の広がり方が確認されている。1955 年に実施された発掘調査では、厚さ 10m、27 層からなる文化層序が確認されている。断絶なく遺構と遺物が検出されており、長期間にわたってこの遺跡が居住の対象となったことを示している。ここで重要なのは、インダス文明期のハラッパー文化に属する層の下にも約 4.5m に及ぶ文化層が確認され、そこから出土するのはハラッパー式土器とは異なる土器であるということである。このハラッパー文化以前の土器はコート・ディジー式土器と命名され、のちに M.R. Mughal によって初期ハラッパー文化として評価されることとなった。ちなみにコート・ディジーとは遺跡と道路をはさんで南北にのぼる丘陵の上に立つ城塞の名称である。1830 年ごろに造営されたというこの城塞建築は保存状態がよく、現在もパキスタン人観光客が数多く訪れている。城塞を囲む城壁の上から遺跡を眺望すると、周辺の景観も含めてよく理解できる。

4月20日にはハイルプルの東に広がるタール砂漠へと向かう。いうまでもなくタール砂漠はインド西部からパキスタン東部に広がる大砂漠である。このタール砂漠の西縁部でハイルプル大学の調査によって多くの遺跡が確認されている。そのうちプーンガル・バンブロー (Poonger Bhanburo) 遺跡とモール・ギチ (Moor Gichi) 遺跡がこの日の目的地である。ハイルプルを出て東に向かうと 5 km ほどでローフリー丘陵にいたる。この丘陵は石灰岩を中心とする堆積岩が隆起して形成されたもので、南北約 75km、東西 20km に及ぶ縦長の丘陵地形である。石灰岩層の内部に良質のチャートの岩塊が含まれ、前期旧石器時代から石器の素材として用いられてきたことで有名である。このローフリー丘陵を東



写真5 タルール・ジー・ビート遺跡



写真6 タルール・ジー・ビート遺跡の遺物散布状況



写真7 コート・ディジー遺跡

に抜けると、タール砂漠である。

チュンディコー (Chundiko) という少し大きな町を最後に集落らしい集落は姿を消す。あとは延々と灌木が散在する砂丘の連なりばかりが目飛び込んでくる。このタール砂漠に入ってしまったところでアクシデントが起こった。エンジンの空冷装置のファンが折れてしまっていて、エンジンが高熱を帯びてしまったのである。やむなく車を止め、マッラーさんとヴィーサルさんは砂丘の上に登って携帯電話で救援を要請する。こんな砂漠の中でも携帯電話が通じるといのは驚くばかりである。そして待つこと 3 時間、ようやく救援の車が修理工場の



写真8 タール砂漠

男の子を連れてやってきた。ファンを取り換えたのち、2台の車で出発。先の難路に備えて修理工も同乗させられる。彼にとっては何とも迷惑な話であったらう。

車窓から砂丘の続く光景を何となく眺めていると、砂丘の上にぽつんぽつんと茅葺の小屋が目についた。マッラーさんの話によると、これは砂漠で家畜の放牧で生活をたてている人々の住まいだという。まさかこのような僻地に人が暮らしているとは驚嘆するばかりであった。そういえば、マッラーさんが昨年日本滞在時に砂漠に暮らす人々のことを語っていたことをようやく思い出す。そうした予備知識をすっかり吹き飛ばしてしまうほど、タール砂漠での体験は驚きの連続である。

タール砂漠に入って約 35km。ようやく目的地の一つであるブーンガル・バンブロー遺跡にたどりつく。遺跡のずいぶん手前で運転をするヴィーサルさんが前方を指さして、遺跡の位置を教えてくれる。砂丘の連続の単調な風景の中で指さされてもわからないだろうと思われるかもしれないが、この遺跡も地表面に膨大な遺物が密集していて、1 km くらい離れたところからでも遺跡の位置がわかる。というのも、密集する遺物の赤色が遺跡全体を染め上げているからである。何とも異様な光景であった。

焼成煉瓦の破片と土器片を主とする遺物が最も高い密度で分布するのは南北約 135m、東西 115m の範囲で、

ちょっとしたマウンドを形成しているが、さらにその周囲 500m ほどの範囲に遺物の分布を確認することができた。マッラーさんの説明では遺跡の西方の低地部にかつてハークラー川の支流が流れており、その水を生活資源の基盤としてこの遺跡が形成されたのではないかとのことである。密集する遺物の量をみれば、かなりの程度で生活が営まれていたことがうかがわれるので、現在は砂漠のど真ん中にある遺跡もかつてはある程度の生活資源を有していたことは確かであろう。散在する土器片の中にはハラッパー式土器に特徴的な多孔土器の破片が混じっているため、インダス文明期の遺跡であることがわかる。

ブーンガル・バンブロー遺跡をあとにして、さらに道なき道を北上する。6km ほど進んだところで西に折れてさらに 8km ほど進んだところで茅葺小屋からなる集落にいたる。35 軒ほどの家からなるこの集落もまた、放牧生活を行う砂漠の民の村である。ここはマッラーさんが調査の時に世話になったところで、突然の訪問にも快く出迎えてくれた。頂いたチャイを飲みながら話を聞いていると、すでに 7～8 世代に及んでこの村が続いているとのこと。マッラーさんは砂漠地帯で遺物が表面に散布するだけの遺跡でも、数百年続いた集落の跡である可能性が高いと自説を語ってくれた。確かにこの村が廃絶して住居が取り払われてしまったら、生活の痕跡は

ごくわずかな土器片しか残らないであろう。砂漠の民の生活様式を改めて考えさせられる機会であった。

この村から北西に5 kmほど進むと、モール・ギチ遺跡に到着する。この遺跡は直径約110m、比高差約5mのマウンドをもち、ほかの遺跡と同様に地表面に多数の遺物が散在している。マッラーさんはこの2月に試掘調査を実施したとのことで、マウンド最上位の厚さ1mばかりが遺物を含む文化層で、それより下位に設定したトレンチでは自然の基盤層が地表直下で確認されたという。さらに最上層の文化層が確認されたトレンチでは人体埋葬が検出されたとのことで、遺跡の性格を明確にするところまでは調査が及ばなかったという。それでも地表面にはインダス文明期のローフリー丘陵産チャート製石刃（一般的には穀物の収穫具に用いられた）が多数見受けられ、生活の場としても機能していたことは確実である。今後再度発掘調査を実施したいとマッラーさんは語る。

4月21日はハイルブル大学に収蔵される出土遺物の調査を行った。バンドー・クボ遺跡の出土資料を中心に見学の予定であったが、パキスタンの大学に共通して午後2時には大学が閉まってしまう、資料見学の時間を十分にとることができなかった。夕方、自分の村に帰っていたマッラーさんが大学に戻り、ローフリー丘陵上の採掘・石器製作遺跡に連れて行ってってくれる。

先述のとおり、ローフリー丘陵で産出する良質なチャートは前期旧石器時代以来石器製作に用いられてきた。インダス文明期にも収穫用の鎌刃として用いられた石刃の素材として多用され、その石刃はインダス文明社会各地に供給されたことが知られている。実際にこのプロジェクトで発掘調査を進めているグジャラート州のカーンメール遺跡とハリヤーナー州のファルマーナー遺跡でもローフリー産チャート製の石刃が出土している。ローフリー産のチャートは一般的には褐色を呈し、ほかの地域では産出しないことが確認されている。ちょっと慣れれば、遠く離れた遺跡から出土したチャートでもローフリー産かどうかの識別が比較的容易である。ゆえに、インダス文明期の交易ネットワークを考える上でローフリー産チャートはきわめて重要な役割を担っている。

マッラーさんが連れて行ってくれたのは、彼が1990年代に調査をしたチャートの採掘坑址と石器製作址である。石器に不慣れ私にも一見して石器製作址とわかる夥しい数の石核と剥片の集中部がいたるところに散在している。私が見学したのは後期旧石器時代の製作址であったが、この時期には文明期とは異なり、暗褐色を呈する



写真9 プーンガル・バンブロー遺跡 遠景



写真10 プーンガル・バンブロー遺跡のマウンド



写真11 砂漠の村



写真12 モール・ギチ遺跡



写真13 ローフリー丘陵

チャートが主体的に用いられていたようである。

採掘址は最大長5mほど、深さ1.5mほどの掘りこみで、現在も発掘調査時のまま保存されている。かつてイギリスを代表する南アジア考古学者F.R. AllchinとB. Allchinは、丘陵上の平坦面に散在する、平面円形で石が表面に集中しない土壌露出部分を石器製作空間として推定したが、マッラーさんたちの発掘調査によってこの土壌露出部分は採掘址であることが確認された。こうした円形の土壌露出部分はいたるところに確認でき、集中的に石材の獲得を目的とした採掘が行われてきたことを物語っている。マッラーさんの話によると、地表面にも良質のチャートが多量に散在しているにもかかわらず、あえて採掘を行ったのは、より石器製作に適した石材を入手することが目的であったという。地表面の風化が進んだ石塊よりもより石器製作に適した母岩を好んだということであろうか。

ちなみに、ローフリー丘陵は石灰岩が基盤となっているが、近年この石灰岩を道路建設のバラスにするなどの目的で、採石場がいたるところに築かれている。ところによっては、丘陵の一部を切り崩してまで採石を行う業者もいて、遺跡保存の観点からは危惧される状況にある。実際、ローフリー丘陵北端のバイパス地区では石器製作址、採掘址、洞窟を含む遺跡地が完全に破壊されてしまった。また、興味深い話として、採石に従事する人々には

パローチスターン出身者が多いという。業者でなくとも、家族単位で小規模な採石を行う人々が丘陵上に小屋をたてて住み着いている。マッラーさんによれば、2年前まではこうした丘陵上に住む人々はほとんど目にするのがなかったが、ムシャラフ政権によるパローチスターン地方の部族に対する武力制圧の結果、パローチスターンを逃れてローフリー丘陵に移住してきて採石を行うようになったのだという。遺跡が失われる危険性は黙認することのできない状況ではあるが、その一方で、高原部から平原部に移住したり、間を往還する人々の存在は、インダス文明の時代にも同様の現象があったであろう可能性を想起させて興味深く感じた。

4月22日にはハイルプルから東に約27kmのところにあるビール(Bhir)遺跡を訪れた。この遺跡はローフリー丘陵とタール砂漠の間を南北に流下するナーラー川の沿岸に位置している。このナーラー川はかつてはハークラ川につながっていたと考えられ、現在はシンド州の北部からアラビア海まで流れている。荒涼たるローフリー丘陵とタール砂漠の間に挟まれて緑豊かな耕作地帯が展開するところである。遺跡は耕作地の直中にあり、南北約170m、東西約100m、比高差約5mのマウンドを形成している。石器製作址と思しき地点やスラッグが散在しており、工房址の集中する遺跡である可能性がある。ハラッパー式土器のほかにコート・ディジー式土

器も散在しており、マッラーさんは発掘調査の計画を立てている。

この遺跡からナーラー川沿いに北西に進む。アロールという歴史時代の重要遺跡を経由して、サッカルに到着。近年ハイルブル大学が数次にわたって発掘調査を進めるラカンジョダロ (Lakhanjodaro) 遺跡を訪れるのが目的である。この遺跡はサッカル市街の北西に位置するが、不幸にも工場誘致地区となってしまう、遺跡の大部分が工場建設によって破壊されてしまっている。それでも空閑地にはマウンドを含む遺跡の一部が各所に残り、かつては大規模な都市遺跡であった可能性を示唆している。マウンドの一部で発掘調査が行われた結果、インダス文明期の焼成煉瓦積建物や、インダス式印章、おもり、土器、土偶など良好な資料が出土している。これまでの発掘調査の概要は Occasional Paper 3 に紹介されているほか、2006 年度に行われた発掘調査の成果の詳細はハイルブル大学が刊行する 'Ancient Sindh' 誌第 8 号に発表されている。

遺跡見学最終日の 4 月 23 日にはハイルブルを出発して、南に約 50km のところに位置するヴィーサル渓谷 (Veesar Valley) に向かう。ヴィーサル渓谷はローフリー丘陵の南端とタール砂漠が接するところにあるが、周囲の景観は砂漠そのものである。砂丘に囲まれた低地部の周囲の斜面地でマッラーさんとヴィーサルさんの調査によって後期旧石器時代を中心とする石器製作址が 99 ヶ所確認されたところである。ローフリー丘陵産の暗褐色チャートを素材とした石核・剥片の集中部がいたるところに点在するさまに瞠目するばかりである。

このヴィーサル渓谷をあとにして北に 8 km のところに、コート・ディジー文化期の石器製作址であるカンダルクキ (Kandharki) 遺跡がある。ここも地表面に遺物が直接露呈・散在する遺跡で、その範囲は最大長 90m ほどであるが、中央部にチャート製石刃の製作址が集中している。計画的に連続して縦長の石刃を剥離した円錐形石核と石刃が無数に分布している。ここで注目されるのは、加熱された 10～20cm 大のチャート原石が集積した状態で確認されることで、石器製作址に集中する石核・石刃も加熱処理の結果ピンク色に変色したものが多い。一般的に原石を加熱することによって剥離を容易にするという効果があるが、この場合もより計画的に規格性の高い石刃を大量に生産することを目的として加熱処理が石器製作工程の中に組み込まれていた可能性を強く示している。

カンダルクキ遺跡から西に 7 km ほどのところに忽然と湖沼群が姿を現す。水が少なくなって塩湖化しているも

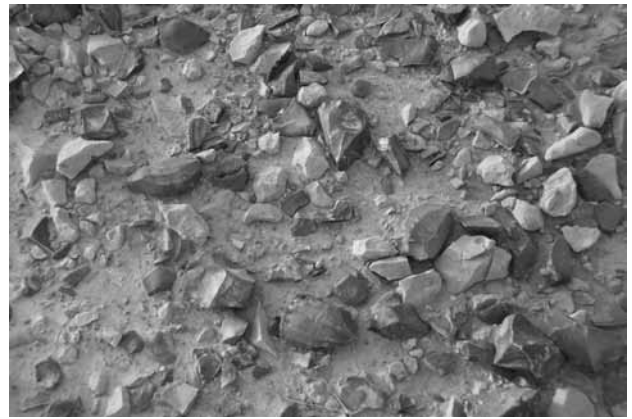


写真 14 ローフリー丘陵の石器製作址



写真 15 ローフリー丘陵の採掘坑



写真 16 ビール遺跡



写真 17 ラカンジョダロ遺跡

のもあるが、豊富に水を湛えたものもある。湖沼の縁辺には葦原が広がり、さらにその周囲を湖面との比高差30mにも及ぶ大砂丘が取り囲んでいる。マッラーさんはこれらの湖沼群の周囲の遺跡をドゥビ (Dubi) 遺跡群と総称している。小規模ながらも数多くの遺跡が散在し、その時期は旧石器時代から歴史時代にまで及ぶ。豊富な水資源を基盤に長期間にわたって人々の生活空間が営まれてきたことを明瞭に物語っている。中にはコート・ディジー文化期の遺跡もある。そのうちのひとつであるガネロ8 (Ganero 8) 遺跡はガネロ湖の南に位置する砂丘の頂部平坦面に位置し、土器を中心とした遺物の表面分布をもつ遺跡である。タルール・ジー・ビート遺跡、プーンガル・パンブロー遺跡、モール・ギチ遺跡などのように、コートディジー文化期からインダス文明期にかけて砂漠地帯へと進出し、砂漠の民と交渉をもった平原部の集団が存在したのであろう。

ちなみにドゥビ遺跡群のすぐそばにマッラーさんの生家がある。豊富な水資源を背景にこの村の周辺では穀物栽培が行われており、まさに砂漠の中のオアシスである。正確な数は聞き忘れたが、煉瓦積みの住居が数百軒があり、人口も相当数に達する様子であった。この砂漠のオアシスに生を受け、アメリカの大学に学び、日本でも研究生活をすごしたマッラーさんはまさに村の名士であろうと思いつつシンド地方の遺跡見学の旅を締めくくった。

* * *

シンド地方はモヘンジョダロ遺跡やチャヌフダロ遺跡、ジュール遺跡、コート・ディジー遺跡などインダス考古学の学史に名を残す遺跡が存在するものの、パローチスターン高原のメヘルガル遺跡やパンジャブ地方のハラッパー遺跡、さらにはインド領内の遺跡の調査に近年の注目が集まり、シンド地方の遺跡はどちらかといえば調査・研究が稀薄な状況にあった。そうした中でハイルブル大学の調査活動はシンド地方のもつ重要性を再びインダス考古学の最前線に押し上げる成果を挙げつつある。

インダス文明はインダス平原からパローチスターン高原に展開したさまざまな文化伝統を呑み込んで成立した文明社会である。また、メソポタミアやイラン高原、ペルシャ湾岸と文化交流をもち、西南アジア世界の中で広域的に展開した文明社会としても知られている。そうした性格をもつインダス文明を読み解く一つの鍵は「交流ネットワーク」にある。今回、シンド地方の遺跡を訪れ



写真 18 ヴィーサル渓谷遺跡群



写真 19 カンダルキ遺跡

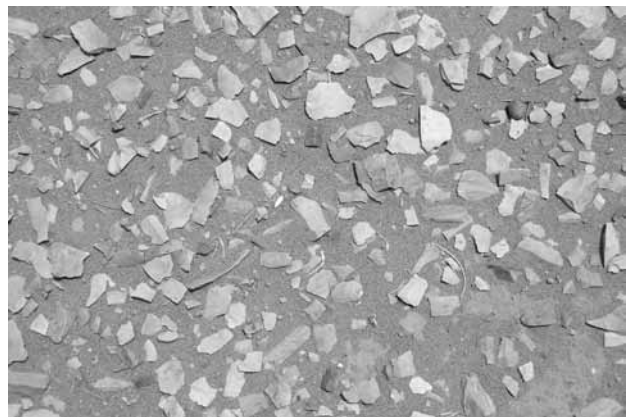


写真 20 カンダルキ遺跡の石器製作址



写真 21 ドゥビ遺跡群周辺



写真 22 インダス川 (サッカールにて)

て実感したのは、この交流ネットワークはきわめて重層化したものであるということである。巨視的にはインダスとメソポタミアといった広域ネットワークがあり、文明社会内部では例えばインダス平原とパローチスタン高原、シンド地方とパンジャブ地方といった地域間ネットワークがある。さらにはタール砂漠の遺跡にみるように、平原部と砂漠地帯に張り巡らされたネットワークがある。

それぞれの階層のネットワークが文明社会の内部で果たした役割は多様であろう。文明社会が重層化したネットワークの均衡性の上に立つとすれば、タール砂漠に進出した平原集団、彼らと接触をもった砂漠の民、そしてその間で往還した物資・情報の流れもまた文明社会を支える基盤の一端を形成していたと考えられる。重層するネットワークの実態の解明は今後の研究課題として措くが、文明社会の衰退の背景にネットワークの変容・解体・消失という現象がうかがわれる中で、一元論的文明史観にとらわれない研究の視座が要請されるであろう。

わずか1週間足らずのシンド地方の遺跡見学であったが、多くのことを体験し考える機会を与えてもらった。

最後となったが、遺跡見学に同行して下さったマッラーさんとヴィーサルさんに深く御礼を申し上げたい。ハイルブル大学を中心としたシンド地方の考古学研究の進展を祈るとともに、またインダス・プロジェクトとし

ても協力できることを楽しみにしている。

イランの遺跡を訪ねて

2007年10月に、長田、上杉、寺村の3名でイランを訪れた。インダス文明と同時代の紀元前3千年紀の遺跡を見学するのが目的である。ご報告が遅くなったが、見学できた遺跡について紹介することとしたい。

2週間弱の訪問であったが、イラン国立博物館に勤務していたD. Akbarzadehさんが旅行の手配をしてくださり、見学を希望していた以外にもイランを代表する重要遺跡を訪れることができた。氏のご厚意に深く感謝したい。

今回訪れたのは、ジーロフト遺跡、シャフリ・ソフタ遺跡、テペ・ヒッサール遺跡、テペ・シアルク遺跡、アリスマン遺跡である。いずれもイランの考古学を語る上で欠くことのできない遺跡で、実際に現地を訪れることによって多くの知見を得ることができた。

ジーロフト遺跡はケルマーン州の南東部に所在する遺跡で、2001年に大がかりな盗掘が発覚して一躍知られるようになった遺跡である。宮殿跡に推定される南マウンドと、ジググラトに推定される北マウンド、そしてその周囲に散在する墓群からなる。盗掘は河川の氾濫で土

砂が流出して露呈した墓群の副葬品を対象としたもので、数多くのクロライト製容器が含まれている。幸い州警察の迅速な対応によって副葬品の一部（500点余り）が回収されてジーロフト市街にある考古博物館に展示されている。

クロライト製容器は緑灰色をした軟質の石材であるクロライトを用いてつくられた容器で、外面にさまざまな浮彫彫刻が施され、ラピスラズリや紅玉髓などの半貴石が象嵌されたものもある。この器物が重要なのは、前3千年紀のメソポタミアの遺跡で広く出土するためであり、一種の威信財として機能していたと推定されている。イラン南東部とペルシャ湾岸に製作遺跡が知られているが、まさにジーロフト遺跡の周辺がクロライト製容器の一大生産地であったと考えられる。

ジーロフト遺跡の発掘調査によって、この地域が単にクロライト製容器の生産センターであったというだけでなく、西南アジア文明世界の社会・文化的中心地の一つであったことが明らかとなった。発掘調査を指揮する元テヘラン大学教授の Y. Akbarzadeh さんにも運良くテヘラーンでお会いすることができ、最新の情報に接することができた。

シャフリ・ソフタ遺跡は1960年代末から1970年代にかけてイタリアの調査隊によって発掘調査が行われた遺跡である。アフガニスタンとの国境に近いところにあり、ヒンドゥークシュ山脈から流れるヘルマンド川の流域に前4千年紀末から前3千年紀前半にかけて盛衰したヘルマンド文明を代表する遺跡である。ラピスラズリの玉製作址も知られており、この地域の政治・経済あるいは宗教の中心地として栄えたところである。

近年ではイラン人考古学者 S.M.S. Sajjadi さんによって発掘調査が進められており、特に墓群の発掘はめざましい成果を挙げている。副葬品の中には、地元の土器だけでなく、西のメソポタミアに通じる土器や東のパローチスターン高原の土器も含まれており、前3千年紀前半の交流ネットワークを考える上できわめて重要な情報を提供している。Sajjadi さんにもテヘラーンでお会いすることができたのは光栄なことであった。

実際に遺跡を訪れてみると、創造していたよりもはるかに大規模な遺跡で、マウンドの地表面には膨大な量の遺物が散在しているという状況であった。発掘調査が進めば、この古代都市の構造の解明が期待される。

テベ・ヒッサール遺跡は北のアルブルズ山脈の南麓に位置する遺跡で1930年代に発掘調査が行われた遺跡である。イランを代表する遺跡の一つである。前5千年紀から前2千年紀にかけてのさまざまな遺物が出土して



写真1 ジーロフト遺跡南マウンド



写真2 ジーロフト遺跡北マウンド



写真3 シャフリ・ソフタ遺跡



写真4 テベ・ヒッサール遺跡



写真5 テペ・シアルク遺跡



写真6 アリスマン遺跡

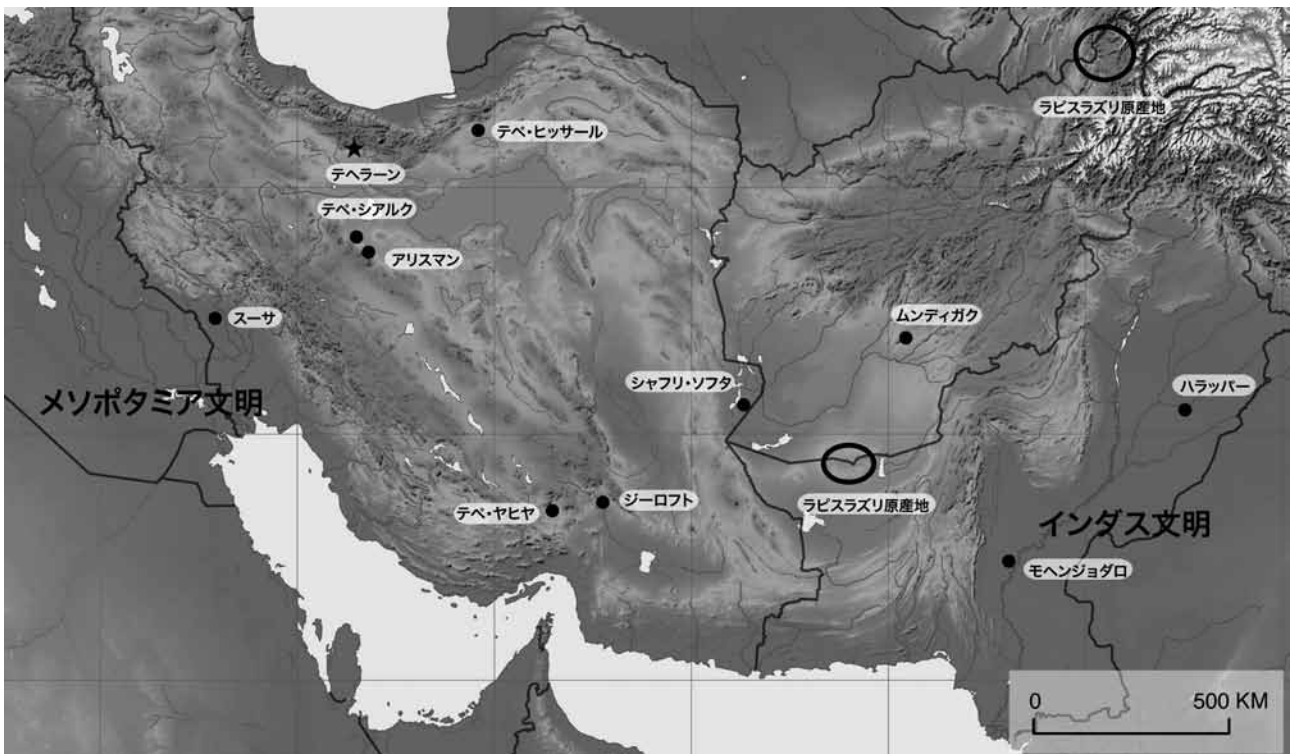


図1 イランの代表的な遺跡

いる。

その出土遺物と遺跡の位置からみると、アルプス山脈の麓を東西に伸びる交通路上に位置し、北の中央アジア南部、東のアフガニスタン北部、そして西方のトルコ方面へとつながった拠点的な遺跡であることがわかる。現在でも遺跡を歩くと、いたるところにラピスラズリの碎片が散在しており、工芸品生産のセンターとしても機能したことがわかる。

一転してテペ・シアルク遺跡とアリスマン遺跡はテヘラーンの南に位置する古都カーシャーンの近郊にある遺跡である。西にはザグロス山脈の峻険な山容がみえる。

テペ・シアルク遺跡もまた1930年代に発掘調査が行われ、古くから知られる重要遺跡である。近年テヘラーン大学の調査隊によって発掘調査が行われている。遺跡は主に2つのマウンドからなり、南のマウンドではジッ

グラトが発見されている。

テペ・シアルクまでくると、その出土土器もイラン東半部の土器とはずいぶんと異なってくる。むしろメソポタミア方面に通じる要素が色濃くなっている。ジッグラトの存在といい、西との交流関係がより強いのである。

アリスマン遺跡は最近イランとドイツの共同調査隊によって発掘調査が行われたところで、ザグロス山脈の銅鉱石をも精錬した一大銅生産センターであることがわかっている。メソポタミアにおいてウルク文化期に都市文明社会が成立する前4千年紀の後半から前3千年紀初頭にかけてメソポタミア方面との交流が強化され、銅の供給センターとして発展したことが調査の結果明らかにされた。

以上、今回の調査旅行で訪れた遺跡をごく簡単に紹介したが、実際にイランを訪れて痛感したのは、イラン高

原がその周辺地域を結びつける十字路として機能してきたことである。前3千年紀の時代にもイラン高原の重要性はきわめて高く、西南アジア文明世界を創り出す鍵となったことは確実であろう。そのイラン高原の東にパローチストーン高原を介して連絡するインダス文明もまた、広域交流というレベルにおいてイラン高原社会と切り離して理解することはできないであろう。

言語 WG 主催 ニコラス・エヴァンス講演会の報告

今年の1月9日、ニコラス・エヴァンス (Nicholas Evans) 教授 (オーストラリア国立大学) の講演会を、京大百周年記念館にて開催しました。インダスプロジェクト言語研究会の主催、言語記述研究会の共催によるものです。エヴァンス教授は、オーストラリアの先住民の言語カヤディルト語をはじめとする少数言語の文法記述で広く知られており、また、世界中の言語の文法特徴を比較研究する言語類型論の第一人者でもあります。インドの言語への関心も高く、プロジェクトリーダーである長田さんとは、長年、ムンダ語の共同研究を続けておられます。考古学、先史人類学、遺伝学など、さまざまな学問領域の専門家との学際的な研究にも係わって来られました。

今回の講演のテーマは、「まだ記述されていない言語の文法をいかに書くか」というものでした。インドの言語の文法記述を進めているわれわれ研究会のメンバーの関心に焦点を合わせて、インドの古代の文法家パーニニはじめ、さまざまな立場の理論を広く概観した後、文法記述の難しさや面白さ、勉強方法や記述の手順などを、体験談を交えながらわかりやすく論じていただきました。講演の後半は、エヴァンス教授の希望もあって、参

加者の今直面している具体的な問題を取り上げながらのワークショップ形式となり、活発な議論が展開されました。特に研究会に参加している若手のメンバーたちには、大変いい刺激になったと思います。また、研究会のメンバー以外にも、言語の記述に関心がある研究者が何人が議論に加わり、熱気のこもった3時間でした。

なお、この日の講演内容は、近いうちに Occasional Paper に出版する予定です。どうぞお楽しみに。

(大西 正幸)

外国人研究員 P. アジトブラサードさんの来日

この4月から3ヶ月間の予定で、インドのパローダーにあるマハーラージャー・サヤジラーオ大学の P. アジトブラサード (Ajithprasad) さんが来日されました。

Ajithprasad さんの研究は多岐に及び、旧石器時代からインダス文明の時代にかけて数多くの論文を発表されています。また、グジャラート州北部とサウラーシュトラ半島を中心にインダス文明期の遺跡の発掘調査を数多く手掛けておられます。最近ではサウラーシュトラ半島のバガーサラー遺跡やカッチ地方のシカルプル遺跡で発掘調査を実施され、多くの成果を挙げられています。

カーンメール遺跡の調査に関連して、多くのご教示をいただくとともに、今後の共同研究に向けて検討を重ねて参りたいと考えています。

6月末までの滞在のご予定ですが、滞在期間中に研究発表の場を設けたいと考えております。またみなさまにもご連絡させていただきます。よろしくお願いたします。



講演会での Nicholas Evans さん



P. Ajithprasad さん

2008年度インダス・プロジェクト全体会議のお知らせ

2008年度のインダス・プロジェクトの全体会議が6月6日（金）に総合地球環境学研究所で開催されることとなりました。国外のメンバーの方では、インドでのカーンメール遺跡とファルマーナー遺跡の発掘調査の報告のほか、P. アジトブラサードさんによるグジャラート地方の遺跡の報告、Q.H. マッラーさんによるシンド地方の遺跡の報告、G.M. ヴィーサルさんによるタール砂漠の中石器時代遺跡の報告を予定しています。また、国内メンバーでは各研究グループに報告をお願いしています。

詳細は後日Eメールにてお知らせいたします。ご参集くださいますようよろしくお願い申し上げます。

国際シンポジウムのお知らせ

インダス・プロジェクトでは全体会議に引き続き、6月7（土）・8日（日）に「古代文明の交流-前3千年紀におけるインダスとイランの交流-」と題した国際シンポジウムを開催いたします。

インダス平原からイラン高原における地域社会の成立と地域間交流の発達の過程を、調査・研究の一線で活躍

する研究者をお招きして考えようというものです。交流ネットワークの発達は文明社会の成立にとって欠かすことのできない要素です。今回のシンポジウムでは各地の最新の成果をもとに、今後の調査・研究の基礎を築きたいと考えています。

プログラム等の詳細は追ってご連絡いたします。全体会議とあわせてふるってご参加ください。



パキスタンの街角の風景

編集後記

ニュースレター第3号をお送りいたします。古環境研究グループの調査成果をご報告いただきました。篤く御礼申し上げます。

昨年後半来のパキスタンにおける政治情勢の悪化も、総選挙を経て徐々に安定しつつあるように見受けられました。インドでは感じる事のない緊張感を感じながらの調査旅行でした。

インド・パキスタン両国でよりよい成果を出せるよう、努力を重ねてまいりたいと思います。

(上杉 彰紀)



インダス・プロジェクト ニュースレター 第3号

プロジェクト・リーダー 長田 俊樹
編集・発行 インダス・プロジェクト
発行日 2008年5月1日

〒603-8047 京都府京都市北区上賀茂本山457-4
大学共同利用機関法人 人間文化研究機構
総合地球環境学研究所
URL: <http://www.chikyu.ac.jp/indus/index.html>

インダス・プロジェクト ニュースレター

第4号

2008年7月31日発行

ごあいさつ

いつもインダス・プロジェクトにご支援ご協力賜りまして、誠にありがとうございます。ここに、インダス・プロジェクトのニュースレター第4号をお届けします。ニュースレターは不定期刊行物で、現地報告やシンポジウムなど研究会の報告をメインに、電子媒体でお送りしております。第4号では、この6月に行われた全体会議や国際シンポジウムの報告、言語学やインド学グループの活動報告を掲載しています。

今回は特にビーズ製作について、遠藤仁さんが現地報告を寄稿してくださいました。遠藤さんはエジプトやシリアでも発掘を経験されておられる若手のホープです。こうした若手による現地報告の発表の場としても、このニュースレターを活用していただきたいと思っております。また、上杉さんが「インダスの土器」という連載をはじめましたが、連載ものも歓迎いたします。小磯さんの連載なども現在計画中です。

本年度末には中間報告があり、また評価委員会にかかります。その中間報告に向けて、年報の刊行も予定しています。文系を主体とする研究の成果は何がなくとも出版物です。皆様からのご寄稿をお待ちしております。

プロジェクトリーダー
長田俊樹

グジャラート州カーンバートのビーズ製作工房

遠藤 仁

2007年末から2008年初頭にかけてカーンメール(Kanmer)遺跡の発掘調査に参加した際、余暇を利用して1月18日～20日にかけての3日間、瑪瑙製ビーズの生産で著名なカーンバート(Khambhat)を訪れた(図1)。この町はキャンベイ(Cambay)湾に面し

た人口8万人程度の小規模な町である。調査には、カーンメール遺跡とともに発掘をしているラージャスターン・ヴィディアピート大学の大学院生R.ミーナ(Meena)氏と、ケンブリッジ大学の大学院生C.ランチェロッチィ(Lancelotti)氏が同行した。

J.S.カラクワール(Kharakwal)博士より、当地の職人アンワール・フセイン・イナーヤト・シェイフ(Anwer Hussein Inyat Shaikh)氏を紹介され、彼の世話になった。シェイフ氏は、インド政府が優れた手工業の職人に授与するNational Awardを2003年に受賞しており、彼の父親も1987年に受賞している、優れた職人一族の若き後継者である。彼の自宅に宿泊しながら、3日間ビーズ製作工程を観察した。職人たちとの会話は主にミーナ氏の通訳に頼った。

石材入手

ビーズは主に玉髄・瑪瑙系石材を用いて生産されているが、チャートやフリントの利用も認められる。それらの多くはマハーラーシュトラ(Maharashtra)州のアウランガーバード(Aurangabad)から搬入されているようであるが、紅玉髄の原石の一部はグジャラート州ラタンプル(Ratanpur)からも搬入されている。そ



図1 カーンバートの位置

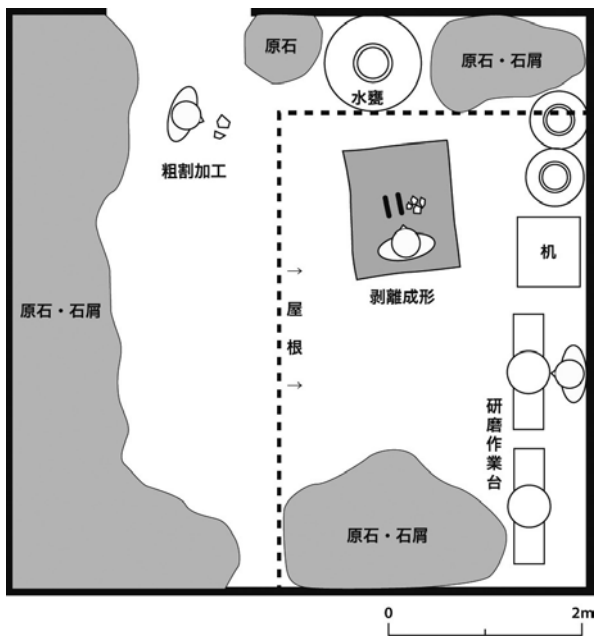


図2 ビーズ製作工房 見取図

他にもグジャラート、マハーラーシュトラ州の各地から様々な色の原石が集められていた。集められた原石は、いずれも原礫面で覆われた未加工の状態では搬入される。それらは人頭大以上(写真1)から拳大(写真2)の大きさまでのもので、各工房のそばにトラックで運ばれ露天に積み上げられ保管されている。

原石のコストは紅玉髓が1kgで20ルピー(1ルピー=2.5円)。他の石材はおおむね1kgを10~20ルピーで購入しているようである。1kgの原石からおよそ5~10個のビーズ製作が可能とのことだった。

工房

ビーズ製作の工房は、下請けの職人が路上で細々と行っているものも多いが、粗割から研磨までを一カ所で行えるような工房もあった。それらの工房は屋内にあるものもあるが、筆者が集中的に観察した工房は、住宅街の一角の空き地に、一部簡単な屋根をつけただけの屋外施設であった。ただし、研磨に電力を使うため電気は引いてあった。

この工房は図2に示したような配置になっており、敷地内の隅には原石や石屑が相当数集積している。電気は電線から直接引き、大きな水甕も置かれていてすべての作業が工房内でできるようであった。

ビーズ加工(粗割→剥離成形)

入手した石材は、原礫面で覆われた人頭大以上の大きさの大きさに分割される(写真3)。それらはまず鉄製ハンマーで20~30cm角、あるいはさらに小さく分割

することもある。

次にビーズの形になるまで間接打撃による剥離成形を行う。間接打撃には鉄製のピンを用いる。これは長さ約90cmの両端の尖ったもので(写真4)、一方を45度程の角度をつけ20cm程地面に埋め込んで固定して使う。鉄製ピンには、先端が刺突具のように鋭利に尖ったものと、やや丸みを帯びたものの2種類がある。はじめに先端がやや丸いものを用いて大雑把な成形を行い、鋭利な先端のもので最終的に加工する。剥離作業は鉄製ピンにビーズ原石を当て、その原石の反対側を水牛の角製のハンマー(写真5・6)で叩いて行う。剥離の細かい調整は鉄製ピンに原石を当てる角度で行っていた(写真7・8)。インダス文明期のビーズに類似した長さ6~8cm程度の細長いビーズの成形には、1点につきおよそ10分の時間を要していた。

写真9は加工時にできる剥片、写真10は加工途中のビーズである。なお、この工程では粗い成形でビーズ1点につき職人に7ルピーが、最終成形でビーズ1点につき7ルピーが支払われる。

ビーズ加工(研磨)

研磨は電動のグラインダーを用いている(写真11・12)。観察中に停電などがしばしば起こり、その度に作業は中断しており、手動で行う代替手段はないようであった。

研磨は医療用の点滴用器具を流用したもので水を自動的に補給しながら、目の粗いものから細かいものまで3段階に分け行っており、最終段階では工業用の研磨材(粉末状)も用いていた。

写真13が完成品である。なお、この工程ではビーズ1点につき職人に10ルピーが支払われる。

ビーズ加工(加熱処理)

加熱処理は紅玉髓の着色のために行う工程である。研磨まで済んだビーズをこの工程により黄色から紅色に変えるのである。写真13の中央のビーズが加熱処理を行っていないもので、左側のビーズが加熱処理を2回行ったものである。双方は元々同じ原石から作られたものである。

加熱処理には専門の職人がおり、屋外に設けられた長さ120cm、奥行き80cm、高さ50cmの煉瓦製の囲い状施設で行われる(写真14)。内部はビーズを入れる壺が並べられ、一度に大量のビーズが処理される(写真15)。土器の中にはビーズと米の籾殻が、土器の周りには木のチップが充填され、そこに火をつけて表面が



写真1 ビーズ原石



写真2 ビーズ原石



写真3 原石の粗割



写真4 間接打撃用鉄製ピン

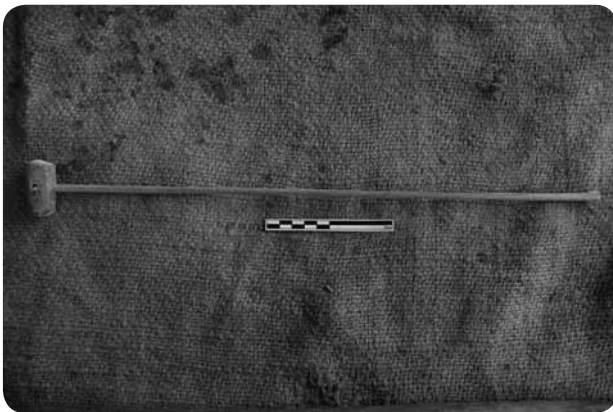


写真5 水牛の角製ハンマー



写真6 水牛の角製ハンマー



写真7 ビーズの成形剥離



写真8 ビーズの成形剥離



写真9 剥片



写真10 未製品



写真11 ビーズの研磨



写真12 ビーズの研磨



写真13 完成品



写真14 加熱処理



写真15 加熱処理



写真16 ビーズの穿孔



写真 17 ビーズの穿孔



写真 18 穿孔道具



写真 19 商品

燃え広がり、数分で火が燦りはじめる。そして囲い状施設にトタンの覆いをかけ 13～14 時間放置する。その後土器を取り出し、1 時間半ほど冷ましたらビーズを取り出す。これが加熱処理 1 回の工程である。ごく稀に火力が強くて、ビーズが破損することもあるようである。

なお、この工程では加熱処理 1 回(ビーズが約 300 点)につき職人に 100 ルピーが支払われる。

ビーズ加工 (穿孔)

現在、通常は電動ドリルでの穿孔が主流であるが、手で穿孔を行う職人が健在であることを聞き、特に頼ん

で作業を観察させてもらった。穿孔職人は町の中心部から北に 8km 程離れた農村に住んでいた。なお、町に住むビーズ加工職人のほとんどがイスラーム教徒であったが、彼はヒन्दゥ教徒であった。

ビーズの穿孔は研磨や加熱処理の後、すなわち最後の加工として行う。電動ドリルは町の中心部にある工場に依頼して行なっていた。手動の穿孔は電動と比べ、倍の時間を要したが、それでも長さ 3cm 程のビーズなら 1 分強で作業は完了していた。

まず、木製の台座にビーズを固定し、水をためた土器に細い管をつけた装置で水を常時補給しながら弓で一気に錐を回し、穿孔する(写真 16・17)。長いビーズは両端から穿孔を行う。錐の先端は鉄製で、そこに工業製ダイヤモンドがつけられている。直径 1～2mm 程の鉄製のピンの先端に、指とハンマーでダイヤモンドをつける姿は、これぞ職人芸とでもいべき匠の技であった。

なお、この工程(手作業)では短いビーズで 15 ルピー、長いビーズで 30 ルピーが職人に支払われる。

ビーズ販売

現在インド国内でのビーズの需要は高くなく、あまり売れないとのことであった。そのため職人も減少しており、この産業は衰退しつつあるようである。近年では中国に輸出することも多いようである。

各工程にかかるコストは前記したとおりであるが、最終的にビーズは 135 ルピーで販売されている。

参考文献

Kenoyer, J.M., M. Vidale & K.K. Bhan (1991) Contemporary stone beadmaking in Khambhat, India: patterns of craft specialization and organization of production as reflected in the archaeological record. *World Archaeology* 23(1): 44-63.
Kenoyer, J.M., M. Vidale & K.K. Bhan (1994) "Carnelian Bead Production in Khambhat, India: An Ethnoarchaeological Study". in B. Allchin (ed.) *Living Traditions: Studies in the Ethnoarchaeology of South Asia*. Oxford University Press, New Delhi.

インダスの土器 ハラッパー式土器 (1)

上杉 彰紀 (総合地球環境学研究所)

土器は遺跡から出土する遺物の 90%以上を占めるの

が一般的であって、土器出現以降の時代の遺跡であればその多寡はあっても必ずといってよいほど土器が出土する。これは南アジアに限られたことではなく、世界各地の土器が用いられた地域において普遍的な事実である。この事実ゆえに、考古学研究においては土器がさまざまな役割を果たす。

一つは遺跡に人が住んだのがいつの時代であったのか判断する時間の物差しとしての役割がある。同じ粘土を素材としてつくられた容器であっても、時代によってその内容は異なっている。例えば用いられる器の種類とその数、器の形、つくり方、装飾要素など、時代が変わればこれらの要素において当然のごとく土器は変化する。形は変わらなくとも装飾が変わる場合もあるし、形やつくり方がすっかり変わってしまうこともある。時代によって、その時代につくられ用いられた土器を特徴づける諸要素の総体（これを様式と呼ぶ）は異なってくるので、結果として土器のもつ諸特徴を細かに観察すればそれがいつの時代につくられたものかわかる。その時間幅は100年のこともあるし、それよりも長い場合も短い場合もある。

諸要素の変化によって引き起こされる土器の変化の背景には、その時代の人々がどのような技術をもち、どのような形の土器をつくらうとしたのかというきわめて社会・文化的な志向性が存在している。土器を日常生活の中でどういった目的に使用しようとしたのか（機能的側面）、また土器をどのように文化的な産物として位置づけていたのか（非機能的・観念的側面）、それが結果として土器という造形に表現されていると考えることができる。その意味で、土器はある時代の社会・文化の産物であり、その時代の生活様式や社会・文化的志向性の一端を私たちに伝えてくれる。

ここから土器研究のもう一つの軸を引き出すことができるだろう。それはある特徴の組み合わせによって把握できる土器様式の空間的広がりを見出すことによって、その時代の生活様式や文化的志向性の広がりを理解するということである。土器の空間的变化には隣接する地域間で漸移的に変化していく場合もあれば、隣接する地域間でもまったく異なる土器様式が存在する場合もある。また、土器様式の一部の要素は漸移的变化を示すが、別の要素は断絶的变化を示す場合もある。例えば、日常的に大量消費される雑器であれば地域を越えても変化に乏しいが、装飾を施し丁寧につくられた特別な土器では地域によって著しい変化をみせる場合がある。このように、土器の空間的变化のあり方の違いには土器が有している社会・文化的産物としての意味や、さらにいえば地域社

会間の関係が投影されている。

土器の変化を時間的・空間的に位置づけていくことによって、ある時代のある地域の社会・文化の様態を明らかにすることが土器研究の目的である。特にどの遺跡でも出土するという利点から、きわめて密度の高い比較分析が可能となる。これはほかの遺物では困難な場合もあって、土器が考古学研究の上で果たす役割は大きい。

* * *

前置きが長くなったが、この小文ではインダス文明前後の時代の土器を紹介するのが目的である。この時代に土器がどのように移り変わり、社会の中でどのような位置づけにあったのか、またインダス考古学において土器がどのような役割を果たすのかご紹介していきたい。まずインダス文明期の代表的な土器様式であるハラッパー式土器を取り上げることとするが、今回はハラッパー式土器研究の問題点について瞥見しておくことにしたい。

ハラッパー式土器は1920年代のモヘンジョダロ遺跡とハラッパー遺跡の発掘調査で出土した土器を標準資料としている。その後の研究はとにかくこの2つの遺跡の出土資料を参照することによって進められてきた経緯がある。この研究初期の発掘調査で出土した土器資料はその出土状況がよくわからなかったり、あるいは今日的な意味での土器研究の視点に基づいて時間・空間軸上において明確に定義されたわけでもなかったため、きわめて漠然とした意味でインダス文明の時代の土器として理解されたところが大きい。

インド・パキスタン独立後に各地で発掘調査が行われ、多くの遺跡でハラッパー式土器が出土することになったが、何がハラッパー式土器なのかという明確な定義を欠いていたがために、遺跡間あるいは地域間での資料の比較研究は容易でない状況が生み出されることとなった。ハラッパー式土器といってもさまざまな種類や形、装飾をもった器を包摂している。また近年、アムリー遺跡やナウシャロー遺跡、ハラッパー遺跡などの層位的出土資料の検討をもとに理解が進んできたように、700～800年続いたと考古学者が推定するハラッパー式土器にも時間的な変化があることがわかってきた（代表的な論文としてハラッパー式彩文土器の変遷を取り上げた(Quivron 2000)を挙げておく)。

とすれば、各地で出土するハラッパー式土器にもさまざまな違いが存在する可能性が高いであろう。ハラッパー式土器が出土すればその遺跡がインダス文明圏に含まれることになり、時として文明の展開した範囲が拡大す

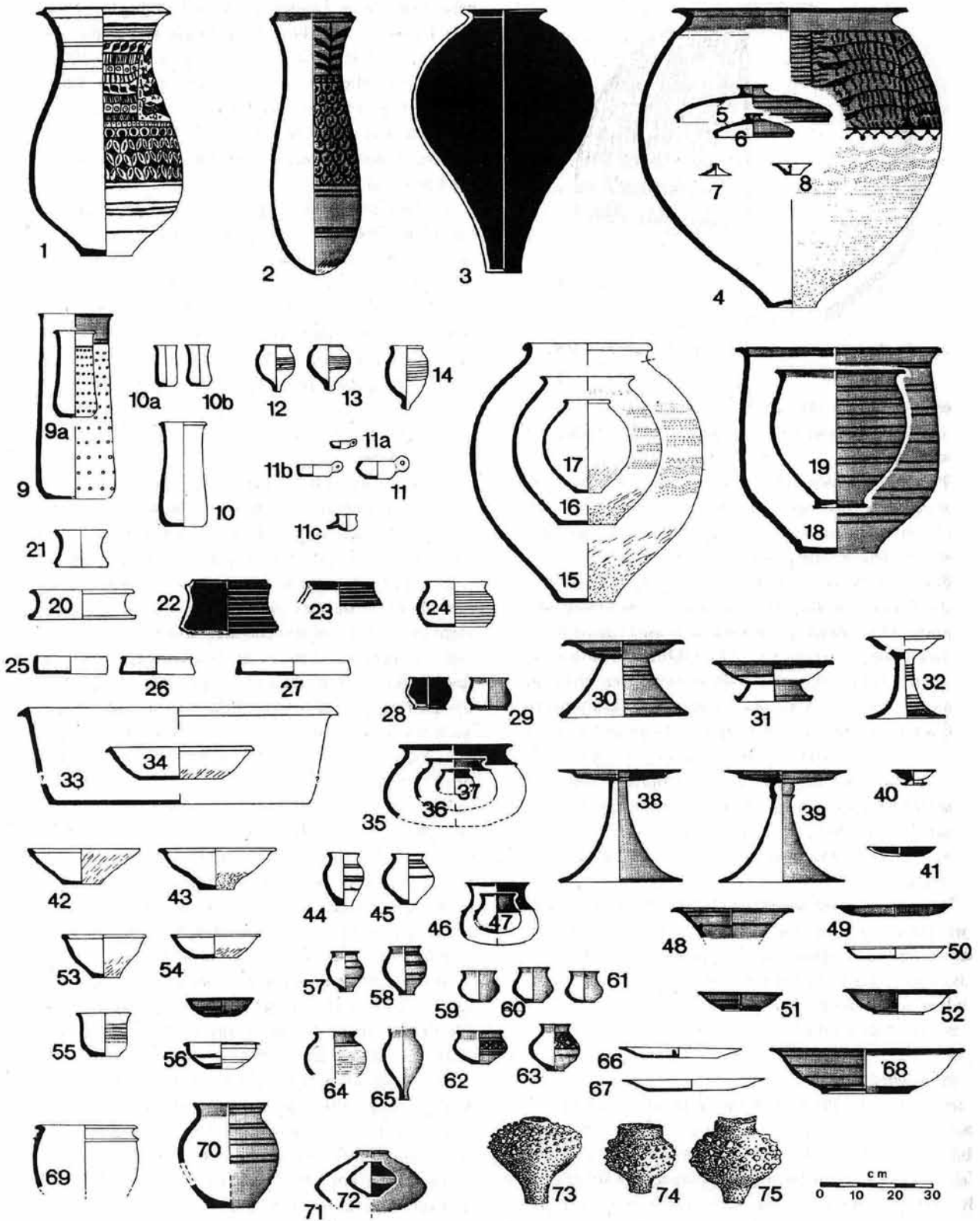


図1 モヘンジョダロ遺跡のハラッパー式土器 (Possehl 2002 より引用。原図は Dales and Kenoyer 1986)

ることにもなるので、ハラッパー式土器の厳密な定義と各遺跡の出土資料の比較分析が重要である。ハラッパー式土器のうちどのどのような種類の器が出土しているのか、それはハラッパー式土器の中でもどの段階に属するものであるのか、また数量的にどの程度出土しているのか、ハラッパー式土器とは異なる土器は出土しているの

かどうか。こうした情報がインダス文明社会の中における各遺跡の位置を理解する助けになることはいうまでもない。

多くの研究者の間では、ハラッパー式土器の厳密な定義は漠然としたままで暗黙の了解となっている部分が多い。その中で1960年代に G.F. Dales が実施したモ

ヘンジョダロ遺跡の発掘で出土した資料の分析 (Dales and Kenoyer 1986) は一般論を越えて個別の資料の分析が行われており、少なくともモヘンジョダロ遺跡で出土するハラッパー式土器がどのような特徴を有しているのか知ることができる。アメリカの調査隊が長年にわたって調査・研究を進めるハラッパー遺跡でも、膨大なデータベースが構築され、出土土器の分析が進められているが (Jenkins 1994, 2000)、全体像は依然よくわからないところが多い。

インド側の遺跡に関しては、多孔土器 (第1図9) のような非常にわかりやすいハラッパー式土器の要素についてはハラッパー式土器としての認識は明確だが、ハラッパー式土器と非ハラッパー式土器の混在が一般的であるグジャラート地方やパンジャブ地方東部では、両者の判別が曖昧に付されている場合が多い。土器の分類体系を確立し、ハラッパー式土器と非ハラッパー式土器の関係を明確にすることがひいてはインダス文明の理解にとって重要となるだろう。

次回はハラッパー式土器の変遷について紹介することにした。

引用・参考文献

Dales, G.F. and J.M. Kenoyer (1986) *Excavations at Mohenjo Daro, Pakistan: the pottery*. The University Museum, University of Pennsylvania, Philadelphia.

Jenkins, P.C. (1994) "Continuity and change in the ceramic sequence at Harappa". in A. Parpola and P. Koskikallio (eds.) *South Asian Archaeology 1993*. Suomalainen Tiedekatemia, Helsinki. pp. 315-328.

Jenkins, P.C. (2000) "The pottery from Cemetery R37: Chronology and the changing social structure of Harappan society". in M. Taddei and G. De Marco (eds.) *South Asian Archaeology 1997*. ISIAO, Rome. pp. 35-53.

Possehl, G.L. (2002) *The Indus Civilization: A contemporary perspective*. Altamira Press, New York.

Quivron, G. (2000) The evolution on the Mature Indus potter style in the light of the excavations at Nausharo, Pakistan. *East and West* 50(1-4): 147-190.

第2回南アジア考古学会国際大会に参加して

上杉 彰紀 (総合地球環境学研究所)

去る5月25日から5月29日まで、イランの古都シ

ーラーズで開催された南アジア考古学会 (Society of South Asian Archaeology) の国際大会に参加する機会を得た。この学会は2006年にインド人研究者を中心にして設立された学会であるが、イラン人研究者もまたその設立当初より関わってきた。今回シーラーズで国際大会が開かれたのは、こうしたイラン人研究者の尽力による。

この国際大会は5月25日から27日までの研究発表と、28・29日のシーラーズ周辺の遺跡巡検から構成されている。インドからは30名ほどの研究者が参加したが、今回の大会で目を引いたのは何といてもイラン人の若手研究者の多さである。当初計画されていたプログラムに相当の変更があったため、実際に何本の研究発表が行われたのか正確に把握することはできなかったが、連日夕刻7時を過ぎるまで活発な研究発表が行われたのは、まさにこうしたイラン人研究者の発表によるところが大きい。また、3つに分かれた研究会場はいずれもイラン人の学生によって埋め尽くされて、イランにおいて考古学が著しく発展しつつある状況を目の当たりにすることができた。さらに付言すると、学生の7割前後は女性であった。

その一方でインド・イラン以外の国からの参加者は低調であった。日本からは筆者に加えて宇野隆夫 (国際日本文化研究センター教授)、小茄子川歩 (東海大学大学院生) が参加したが、そのほかの外国人としてはフランス人研究者1名のみであった。

残念ながらイラン人の研究者・学生ともに英語を理解しないか、あるいは不得意で、研究発表の大半はペルシャ語によるものであった。中には発表要旨、発表用のパワーポイントファイルもすべてペルシャ語によるものもあって、発表のテーマすら理解できない例があったことは残念であった。また、本来インドとイランの文化交流を軸にした学会ということで聞いていたものの、インド人研究者の発表にもそうした本来の趣旨から大きく逸脱



写真1 会場



写真2 会場内の様子



写真3 ペルセポリス

して、イラン人の研究者・学生の関心を惹かないものもあったようだ。このあたりに国際学会運営の難しさがあるのだろう。

それでもイラン人の研究者・学生との交流は、イラン考古学の今後の発展を期待させるに十分であった。イラン国立考古学研究センターのセンター長であるハッサン・ファゼリ＝ナシュリ氏 (Hassan Fazeli-Nashli) によれば、イラン人研究者と外国人研究者の共同調査が活発に進められており、今後も積極的に外国の調査隊を受けて入れていきたいとのことであった。そうした中でイラン人の研究水準を高めたいとの狙いがあるようだ。イラン人の若手研究者も、将来的には積極的に英語でその研究成果を発表したいという強い希望を持っており、状況は急速に変わっていくであろう。そうした期待を抱かせるに十分な熱気のコもった研究発表であった。

27・28日にはイラン国外からの研究者を中心にシーラーズ周辺の遺跡巡検が実施された。27日には世界遺産として名高いアケメネス朝の都ペルセポリス（ペルシャ語ではタフテ・ジャムシード）と、ナクシュ・イ・ルスタムにあるアケメネス朝諸王の摩崖墓群、アケメネス朝初期の都パサルガードを訪れた。ペルセポリスは世界遺産として整備が進んでおり、我々以外にも多くの外国人観光客が訪れていた。宮殿遺構とその各所を荘厳する浮彫群はさすがに大迫力で、学生のころから写真でしかみることのできなかつた遺跡現地に立つことができたのは、かけがえのない経験であった。これらの遺跡の見学を通して、あらためてペルシャ文明の奥深さを知るにいたった。

続く28日にはシーラーズの西にザグロス山脈を抜けたところにあるサーサーン朝の都ビシャプールとシャハプールの浮彫群を訪れた。車中から望むザグロス山脈の光景は壮大で、まさにイラン高原とメソポタミア平原を画する自然の障壁であった。その一方で、ザグロス山脈



写真4 ペルセポリスの浮彫彫刻



写真5 ナクシュ・イ・ルスタムの摩崖墓群



写真6 シャハプールの浮彫彫刻



写真7 タル・イ・パークーン遺跡



写真8 タル・イ・マリヤーン遺跡

中をつらぬく交通路が存在し、イラン高原とメソポタミア平原の間で頻繁な交流があったのも事実である。最高所を抜けると、谷間にコムギが栽培され、川のほとりではヒツジを放牧する人々の姿を認めることができた。テントを張って放牧する人々もみられたが、より本格的な遊牧民であろうか。只々、自然の壮大さと人々の暮らしに目を奪われるばかりであった。

ビシャプールはザグロス山脈を抜けてメソポタミア平原へと移っていく地形の変化点に位置している。東を望めば険しいザグロス山脈の威容が、西を望めばなだらかな地形が低い山々を抱きながら広がっている。遺跡は石積城壁によって囲まれ、その内部で宮殿遺構やアナーヒター女神を祀った神殿遺構などが発掘されている。ビシャプールのすぐそばにあるシャハプールの浮彫群は、サーサーン朝の王侯像と、王権を授けるアフラマズダ神を描いたものである。ペルセポリスでみたアケメネス朝期の浮彫に比較すると、ローマ美術の影響を受けてか、より彫りが深く、写実性が高い表現となっている。前日のアケメネス朝に続いて、この日はサーサーン朝の歴史について遺跡を通して理解を深めることができた。

また、学会が始まる前に、ペルセポリスがあるマルヴダシュト平原に所在する先史時代の遺跡を訪れた。一つ

はかつて東京大学のイラン・イラク調査隊が発掘したこともあるタル・イ・パークーン遺跡であり、いま一つは前3千年紀の都市遺跡として名高いタル・イ・マリヤーン遺跡である。これらの遺跡はイランの先史時代だけでなく、イラン高原とメソポタミア平原、そしてイラン高原と東のパローチスターン高原の文化交流を考える上でもきわめて重要である。

研究発表、遺跡巡検を通して、イラン人の外国人に対する強いホスピタリティに接することができた。イランを取り巻く国際情勢は日々厳しくなっているが、そこに暮らすのはきわめて穏やかで、笑顔を絶やすことのない人々であった。昨年10月に続いて2度目のイラン訪問となったが、また機会があればぜひとも訪れてみたいと思う。

2008年度 インダス・プロジェクト全体会議の報告

寺村 裕史（総合地球環境学研究所）

6月6日（金曜日）に、7・8日に開催される国際シンポジウムに先立ち、地球研インダス・プロジェクトの全体会議が開催されました。発表内容としては、物質文化研究グループとして、インド・パキスタンにおける発掘調査遺跡（予定も含む）それぞれの概要と現在までの成果、および日本隊としてGIS（地理情報システム）を用いた地形測量や写真測量の成果を、そして古環境研究グループ・生業研究グループ・伝承文化研究グループそれぞれの調査活動と今後の予定などの報告が、主な内容です。

会議はまずプロジェクトリーダーである長田俊樹教授から、本会議の趣旨説明とインダス・プロジェクトで現在動いている調査研究の簡単な状況についての話しから始まりました。その後、各発表者の報告に移りましたが、以下順を追って簡単に述べていきたいと思います。

最初の報告はP. アジートブラサードさんの「グジャラート地方における遺跡の調査」です。インダス・プロジェクトで実施している発掘調査ではありませんが、2008年度の4月～6月末までの3ヶ月間、外国人研究員として地球研に滞在されていることから、特別発表していただきました。現在アジートブラサードさんはグジャラート州のシカルプル（Shikarpur）遺跡を発掘調査されており、その調査成果について報告していただきました。シカルプル遺跡はプロジェクトで調査している



写真1 会場の様子

カーンメール (Kanmer) 遺跡とも距離が近く、両遺跡の関係なども今後の重要なポイントと考えられます。

次の報告は V. シンデさんによる「2007 年度 インド・ファルマーナー (Farmana) 遺跡の発掘調査」で、前年度までは試掘だったのですが、2007 年度は本格的に発掘調査が開始され、広範囲の住居遺構や墓から出土した人骨・副葬品など、貴重な成果が挙げられている様子を報告していただきました。

昼食後、最初の発表は J.M. ケノイヤーさんの「パキスタン・ガンウェリワラー遺跡採集の遺物」で、まだ発掘調査は始まっていないのですが、今年度発掘開始予定のガンウェリワラー (Ganweriwala) 遺跡において表面採集されている遺物についてや、遺跡のコンター図作成の様子から、現時点でのガンウェリワラー遺跡の評価と重要性について幅広く報告していただきました。

次は J.S. カラクワールさんによる「2007 年度 インド・カーンメール遺跡の発掘調査」の予定だったのですが、カラクワールさんがビザ取得等の関係上来日できなくなったため、急遽プロジェクト研究員の上杉さんが代わりに発表することになりました。カーンメール遺跡の紹介と、発掘調査における遺構検出状況や出土遺物の説明などをしていただきました。

休憩を挟んで、宇野隆夫・寺村裕史・近藤康久による「インダスプロジェクトにおける考古学 GIS」という題名で、代表として寺村が発表しました。カーンメール遺跡・ファルマーナー遺跡において実施している地形測量や写真測量など、考古学的な発掘調査以外の部分で GIS を用いておこなった調査成果についての報告でした。

次は前杵英明さんによる「古環境研究グループの調査活動」に関する報告で、コンピュータを用いた海水準変動に関するシミュレーション結果や、今後行なう予定のボーリング調査などについて報告していただきました。

次は大田正次さんによる「生業研究グループの調査活動」で、Palaeoethnobotany・Ethnobotany という二

つのアプローチを柱とした生業研究グループの目的やメンバー構成、エンマーコムギなどを対象とした具体的な調査方法についての説明がありました。

最後の報告は堂山英次郎さん、大西正幸さんによる「伝承文化研究グループの調査活動」についてでした。まず大西さんは伝承文化研究グループの中でも言語ワーキンググループの活動内容の紹介や、南アジアの言語地図の作成計画について、また堂山さんは、リグ・ヴェーダのドイツ語翻訳など、活動成果について報告されました。

以上、当日ミーティングにおいて報告された内容について、簡単ですが紹介させていただきました。いろいろな他分野の方のお話しも聞くことができ、それぞれの研究グループの方々が一体どのような調査・研究をなさっているのかということが、よくわかり有意義な会であったと思っています。

インダス・プロジェクト国際シンポジウム

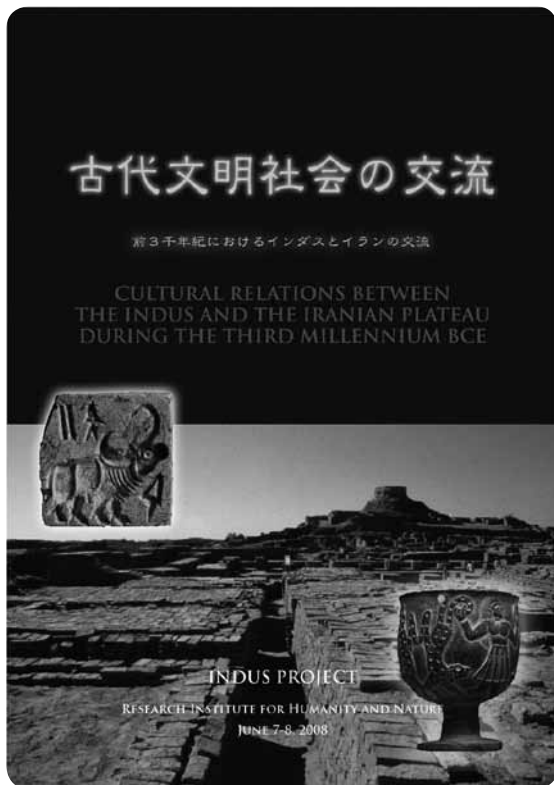
古代文明社会の交流—前3千年紀のインダスとイランの交流—
報告

上杉 彰紀 (総合地球環境学研究所)

6月7・8日にインダス・プロジェクト主催の国際シンポジウムを開催した。前3千年紀を中心とする時代のイラン高原とインダス川流域の文化交流をテーマとするもので、イラン、インド、アメリカ、ドイツ、フランス、フィンランドから一線の研究者を招いてのシンポジウムであった。

イランからはイラン国立考古学調査センターのハサン・ファーゼリ=ナシュリ氏をお招きし、イラン考古学の現状について発表していただいた。21世紀になってからイランでは外国の調査隊に対して広く門戸を開き、イラン人研究者との共同調査が旧石器時代から歴史時代に及ぶさまざまな遺跡において推進されている。そうした最新の研究動向について概括的な紹介をしていただいた。

同じくイラン出身で現在はフランスに住むユースフ・マジードザージェ氏には、2001年から実施されているジールフト遺跡の発掘調査成果について発表していただいた。この遺跡は盗掘によって広く知られるようになった遺跡であるが、6次に及ぶ発掘調査によって、宮殿跡に推定される大規模遺構 (コナール・サンダルA遺跡) と、神殿に推定される階段状遺構 (コナール・サンダルB遺跡) が明らかにされている。また、その出土遺物はイラ



ン高原とメソポタミア平原の文化交流を考える上で欠くことのできない情報源となっている。

上杉は前4千年紀から前3千年紀前半にかけてのインダス平原とパロースターン高原の関係を、イラン高原も視野に入れた上で発表した。文明社会が広大な地域に展開した地域社会の統合体であるとすれば、そうした地域統合が各地の地域社会が地域間交流によっていかに進められたのか理解する必要がある。通時的に地域社会の形成と地域間交流の発達を俯瞰することによって、インダス文明社会の形成過程を考察しようとしたものである。

インダス文字研究の大家として知られるアスコ・パルポラ氏（ヘルシンキ大学名誉教授）は、メソポタミアからイラン高原に展開した宗教図像を取り上げ、インダス文明との関係を考察した。前3千年紀前半を中心にメソポタミア平原からイラン高原には共通する宗教図像が存在することを膨大な資料をもとに論じたのち、インダス文字に含まれる人形の文字にこれら西方につながる要素が存在することを指摘した。

外国人研究者として4月から総合地球環境学研究所に滞在されているP.アジートプラサード氏（マハーラージャー・サヤジラオ大学）はグジャラート地方における初期ハラッパー文化期の遺跡・遺物の検討を通して、グジャラート地方がインダス文明社会の形成過程でその交流圏を広げていく様相について論じた。グジャラート地方にはインダス文明期以前からさまざまな地域文化伝



写真1 ハサン・ファーゼリ=ナシュリ氏



写真2 ユースフ・マジードザーデ氏



写真3 ロラン・ベゼンヴァル氏



写真4 アスコ・パルポラ氏と J.M. ケノイヤー氏

統が存在したが、前3千年紀前葉にはシンド地方やパローチスターン高原南部とも交流関係を有するようになる状況を明らかにした。

ドイツ国立考古学研究所のウテ・フランケ氏は、パローチスターン高原における文化交流について論じた。特に氏が実施したソーフル・ダンプ（ナール）遺跡の発掘調査によって、パローチスターン高原南部の先史文化編年が確立されてきたが、前4千年紀から前3千年紀にかけてパローチスターン高原のみならずイラン高原をも内包する文化交流ネットワークが形成された状況が明らかにされた。

フランス・アフガニスタン調査隊のロラン・ベゼンヴァル氏は、パローチスターン高原南部のマクラーン地方における先史文化について発表した。ミリ・カラート遺跡とシャーヒー・トゥンプ遺跡というマクラーン地方を代表する遺跡の発掘調査によって、イラン高原とインダス平原の間にあるこの地域が東西交流の上で重要な役割を果たしてきたことが明らかになりつつある。特に前4千年紀から前3千年紀初頭にはイラン高原とのつながりが強かったのに対し、前3千年紀中頃にかけて東のパローチスターン高原中央部やインダス平原との関係を強くしていくという状況は、インダス文明社会の成立過程を考える上できわめて示唆的であった。

ハラッパー遺跡の調査を指揮する J.M. ケノイヤー氏（ウィスコンシン大学マディソン校）は、ハラッパー遺跡の資料をもとに発表を行った。特に1期とされるラーヴィー文化期と2期のコート・ディジー文化期の資料に焦点を当て、遺構・遺物の点でのちのインダス文明へと継承されていく要素がすでに前4千年紀からパンジャーブ平原に存在したことを論じた。合わせて、ハラッパー遺跡に搬入される石材、銅鉱石などの諸資源の原産地推定研究についても論及し、ハラッパー遺跡の展開の背景にある地域間交流の様態についても報告した。

インダス・プロジェクトによるファルマーナー遺跡の発掘調査を指揮するヴァサント・シンデ氏（デカン大学）はインダス平原の東方に展開する地域における先史文化の展開とインダス文明の形成過程の関係について論じた。インダス文明社会の形成が東方地域をも広く巻き込みながら進行したことを指摘した。

前川和也氏（国土館大学）と森若葉氏（総合地球環境学研究所）はメソポタミアの楔形文字文書資料に登場するメルッハ、マガン、ディルムンという地域名称について一次資料の解読研究成果に基づきながら発表した。時代によってメソポタミアとこれら3つの地域の関係に変化があることを再確認し、広域地域間交流の歴史的展開

について論じた。

以上、各研究発表について瞥見してきた。インダス文明成立の歴史的背景をいかに考えるかという問題は、古くて新しい問題である。単純化すると、これまでの研究はインダス平原の外部からの影響を高く評価する説とインダス平原内部の自律的展開を強調する説に大別されるが、地域社会の形成と地域間交流の発達、そして両者の関係は文明社会という広域社会・文化的統合体の形成過程を考える上で重要であることは異論のないところである。今回のシンポジウムにおいて各地の最新の研究成果が一堂に会したことは大きな成果であった。資料をいかに読み解くかという点で研究者間の相違点も浮き彫りになる一方、各地の歴史的展開の軌跡に極めて強い一貫性があることも確認でき、今後の研究の展開にとって有意義であった。参加された方々に御礼申し上げたい。

国際ワークショップ「歴史言語学の現在」

大西 正幸（総合地球環境学研究所）

言語 WG は、6月20日に、3人の歴史言語学の専門家をお招きして、「歴史言語学の現在」と題するワークショップを開催しました。当日は、雨にもかかわらず、研究者や大学院生など、30人以上の聴衆が集まり、熱気に充ちたものとなりました。

ワークショップは、まず、オーストロアジア語族の東言語グループ、モン・クメール諸語の権威であるジェラルド・ディーフロス教授による、「オーストロアジア語族の故地について」という発表で口火が切られました。いくつかの動植物語彙を手懸かりにオーストロアジア語族の故地を推定する、興味深い内容でした。オーストロアジア語族の西言語グループとしては、長田俊樹教授が専門とするインドのムンダ諸語が存在しますが、その起源地については、インダス説をはじめ諸説あり、決着をみていません。今回の議論は、この問題にも直接関連するもので、今後の研究の進展が期待されます。

ディーフロス教授に続いて、オーストラリア国立大学のニコラス・エヴァンス教授は、「現存の言語から古代文字を読み解く」という題で、文字解読のこれまでの歴史と、その方法論をめぐる、広い視野に立った議論を展開されました。この発表も私たちのプロジェクトに直接関連するもので、インダス文字や、近年イランで発見された新しい文字の解読へのアプローチの仕方にも示唆



写真1 会場の様子



写真2 ジェラルド・ティーフロス教授

を与える内容でした。(今回の内容を含むエヴァンス教授の著書が、今年末にイギリスから出版されます。私たち言語 WG は、エヴァンス教授の全面的な協力のもと、その日本語版の出版を行なう予定です。)

最後に、ハワイ大学のアレクサンダー・ヴォヴィン教授が、地名の実地調査や万葉集東方言の文献資料をもとに、アイヌ民族が上代には本州の中南部にも広汎に居住していた、との仮説を提出されました。話者集団の痕跡を地名に求める方法については、インダス文明に関連しても、西インドやパキスタンの地名を手懸かりに基層言語の痕跡を探る、ヴィツェル教授の試みがあります。ヴォヴィン教授の発表は、歴史言語学の重要な部分を占める地名研究にも、実地調査に基づく跡づけが重要であることを、改めて指摘してくれた点など、私たちも学ぶところの多いものでした。

いずれも刺激的な発表で、発表のあと、発表者同士や、会場の参加者との間に、長時間にわたる質疑や議論が展開されました。

なお、私たち言語 WG は、今回のワークショップを、将来、歴史言語学者と考古学者の共同による国際シンポ

ジウムを開催するための、予備的なものと位置づけています。今後の展開にご期待ください。

ピーター・ベルウッド著（長田俊樹・佐藤洋一郎監訳）
『農耕起源の人類史』の紹介

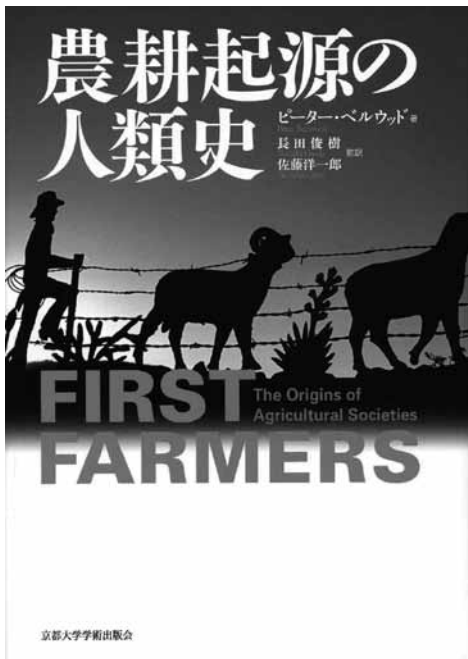
森 若葉（総合地球環境学研究所）

総合地球環境学研究所（以下、地球研）では、長田俊樹教授と佐藤洋一郎教授の監訳のもと、ピーター・ベルウッド（Peter Bellwood）氏によるの "First Farmers" (Blackwell, 2005) を訳しました。翻訳は、地球研のメンバーを中心とするグループで行われ、『農耕起源の人類史』として6月下旬に京都大学学術出版会から出版されました。6月20日には、出版を記念し、著者のベルウッド教授を招いての講演会ならびにパーティーが京都大学の芝蘭会館で開かれました。

ベルウッド氏は、オーストラリア国立大学教授で、主にオセアニアから東南アジアをフィールドとする考古学者です。数多くの著作が知られ、日本においては、『ポリネシア』（池野茂訳、大明堂、1985年）と『太平洋：東南アジアとオセアニアの人類史』（植木武・服部研二訳、法政大学出版局、1989年）がすでに翻訳されています。

本書は、農耕社会がどこでいつどのように生じ、どの方向に拡散していったのかを、農耕言語拡散仮説の立場から扱ったものです。この仮説は、主たる農耕の起源とその拡散が、主要な語族の起源および拡散にかさなるというものです。農耕・牧畜を行う人間集団が移動するにつれ、その農耕文化とともに、彼らが話す言語が、拡散していき、それによって現在の語族が形成されるにいったと考えます。本書では、考古学、農学、人類学、言語学、遺伝学といった異なる分野からの膨大な文献とデータをもとに、この仮説が提示されています。この本の新しい点は、すでにいくつかの地域で個別に提示されていた同様の仮説を、世界全域に適用した点にあります。語族規模で言語が拡散するためには集団移動が不可欠であって、まとまった数の人間が移動することなく言語だけがひろがることはない、彼は考えます。この本によると、このような農耕と言語の拡散の一致は、中東や中国、西アフリカ、ニューギニア高地、メソアメリカ、そしてさらには日本においても確認されます。

実際の翻訳作業自体はかなり難航しました。企画段階の2005年から4年あまり、出版は当初の予定よりかなりずれこみました。これは、どの章にも様々な分野の



専門用語が数多く使われていること、世界中の考古遺跡名、言語名、民族名など、あまり知られていない固有名詞が数多くあらわれること、また、英文に凝った言い回しが多く使われていることなどの理由によります。さらには、それぞれ専門を異にする11人で翻訳を担当したため、集まって議論する機会がなかなかもてず、その結果、多岐にわたる分野の用語統一にたいへん苦勞することにもなりました。

しかしながら、学際的かつ世界各地の多様なデータを駆使した本書の翻訳は、いろんなバックグラウンドの人材が集う地球研ならではの作業であったといえます。先史時代から近現代にいたるタイムスパン、そして全球的規模という壮大なスケールの仮説が、本書をとっても魅力的なものにしています。このような本を著したベルウッドにはただ感嘆するばかりです。機会がございましたら、ご一読いただければ幸いです。

各章のタイトルおよび翻訳担当者は以下の通りです。

- 序および第1章 初期農耕拡散仮説の展望
長田俊樹 (地球研・教授、監訳者)
- 第2章 問題提起-農耕の起源と拡散
内山純蔵 (地球研・准教授)
- 第3章 西南アジアにおける農耕の起源
丹野研一 (地球研・プロジェクト上級研究員)
- 第4章 肥沃な三日月地帯をこえて-ヨーロッパとアジアにおける農耕拡散をたどる
有村 誠 (前地球研・プロジェクト研究員、
現東京文化財研究所研究員)
- 第5章 アフリカの農耕-もう一つの起源
梅津千恵子 (地球研・准教授)

- 第6章 東アジアにおける農耕の起源
村上由美子 (地球研・プロジェクト研究員)
- 第7章 東南アジア、オセアニアへの農耕の拡散
秋道智彌 (地球研・教授)
- 第8章 アメリカ大陸における初期農耕
福永健二 (前地球研・プロジェクト上級研究員、
現広島県立大学准教授)
- 第9章 語族は人類の先史に対してどのような意味をもつか
- 第10章 農耕の拡散-考古学と言語学の比較から
森 若葉 (地球研・プロジェクト上級研究員)
- 第11章 遺伝子、古人骨、人々の身体特徴からさぐる
片山一道 (京都大学大学院理学研究科教授)
- 第12章 初期農耕拡散の特徴
佐藤洋一郎 (地球研・教授、監訳者)

『リグヴェーダ』ドイツ語新訳の紹介

堂山 英次郎 (大阪大学)

伝承文化研究グループ・インド学班は、各人の専門領域を活かし、深化させながら、プロジェクトへの寄与に努めている。特に強調すべき成果としては『リグヴェーダ』の翻訳が挙げられる。『リグヴェーダ』(以下、RV)は、前1200年頃にインダス川上流域で編纂されたと考えられる神々への讃歌集である。まとまった量の文献としては印欧語最古の資料であり、印欧語比較言語学の誕生・発展を支えてきたばかりでなく、インドイラン語共通時代、初期のインドアーリア語文化の情報を伝える貴重な情報源でもある。「インダス文字」が解読されていない現状では、時代・場所ともにインダス文明の最も近くに位置する外部文献資料として特別な重要性を有する。

2006年からは、本プロジェクトメンバーである後藤敏文(東北大)、堂山英次郎(大阪大)の他、各種シンポジウムや講演会等にて実質上プロジェクトに貢献を続けてくれているM. ヴィッツェル(ハーヴァード大)、そしてM. イェジチ(ザグレブ大)の4人によるRVのドイツ語全訳プロジェクトが始まり、ドイツのVerlag der Weltreligionen(世界諸宗教出版)の原典訳シリーズから4分冊で出版されることになった。2007年9月には第1巻が*Rig-Veda: Das heilige Wissen*(2007 Frankfurt/Leipzig, 889頁。RV第1, 2巻を収録)として、シリーズ第一陣を飾って出版され、学界やマスコ



ドイツ語新訳 Rig-Veda 第1巻表紙



訳者3人(着席)と編集責任者 Simm 氏(右端)及び編集協力者 Gräfe 氏(後列)。2007年10月インゼル、ズーアカムプ社(フランクフルト)の編集室にて

ミからも大きな反響が寄せられている。RVの全訳は、K. ゲルトナー (Geldner) が手がけて以来事実上80年ぶりの大事業であり、その間になされた学術的進歩を考えると、新訳の出版が持つ意味は甚大であり、各方面から今後インド学のスタンダードワークとしての役割を期待されている。

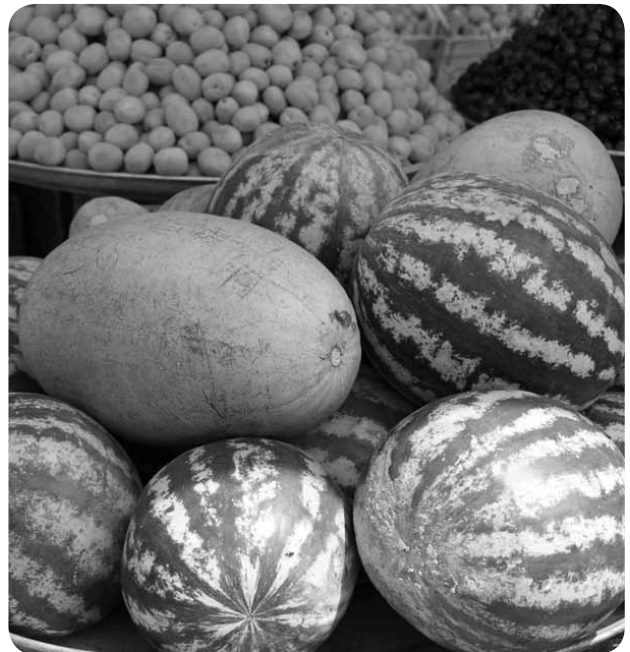
新たな水準のRVが訳し直され、古代インドの地理、社会、生活等についてより正確な情報が提供されれば、インダス文明の理解にとっても新たな知見と視座が得られるものと予想される。サラスヴァティー川を巡る讃歌、言及、アーリヤの人々の東方への進出、遊牧、栽培の実態などについて、具体的な研究も進めている。これらを基に、南インド、現在各地のフィールドを専門とするメンバーと、さらに知見の摺り合わせを行い、成果に結実させたい。

編集後記

早くも2008年も夏を迎える頃となりましたが、いかがお過ごしでしょうか。6月には全体会議と国際シンポジウムが開催され、プロジェクトの活動も着実に進んでまいりました。

年末にはプロジェクトの中間報告が控えています。各研究グループの調査・研究成果をプロジェクトの目的に沿ってまとめ上げていくという大きな仕事となりますが、このニュースレターを各研究グループの進捗状況や調査・研究の中で得た発想などの発表の場としてご活用くだされば幸いに存じます。

最後になりましたが、今号にご寄稿くださった方々に篤く御礼申し上げます。(上杉)



イラン、シーラーズのヘンダヴァーネ (スイカ)

インダスプロジェクト ニュースレター 第4号

プロジェクトリーダー 長田 俊樹
編集・発行 インダス・プロジェクト
発行日 2008年7月31日

〒603-8047 京都府京都市北区上賀茂本山457-4
大学教利用機関法人 人間文化研究機構
総合地球環境学研究所
URL: <http://www.chikyu.ac.jp/indus/index.html>